

開発こうほう

Hokkaido Development Association

共に北海道の未来を創る

September, 2025

9月号

北海道新時代

物流の2024年問題による輸送力不足について北海道内の実態と対応策
DMOの使命：持続可能な未来のデザイン

シリーズ「地域コミュニティ」

北海道における地域コミュニティの活性化に向けて

地方創生

第2期中標津町まち・ひと・しごと創生総合戦略

脱炭素～北海道における再生可能エネルギー

白糠町における脱炭素への取組み

ガストロノミックツーリズムin北海道

「札幌」

ほっかいどう学

北海道におけるタンチョウの現状～生態と保護の歴史～





北海道遺産
Hokkaido Heritage

『明治の面影』（『北海道遺産フォトコンテスト2016』応募作品）

撮影者 山内 佳子 様

北海道遺産 「札幌苗穂地区の工場・記念館群」

札幌市の創成川以東は、豊平川の伏流水や貨物輸送の利便性などによって明治期から「産業のまち」として栄え、今も福山醸造をはじめ、さまざまな工場や倉庫がひしめき、下町的な雰囲気を残している。苗穂駅近隣にある北海道鉄道技術館、サッポロビール博物館、酪農と乳の歴史館、千歳鶴酒ミュージアムは内容も充実し、北海道の産業史を知る上でも貴重な記念館群を形成している。

Contents

北海道新時代①

物流の2024年問題による輸送力不足について北海道内の実態と対応策
ー持続可能な物流体制構築に向けた課題と展望ー 1
経済産業省北海道経済産業局産業部産業振興課

北海道新時代②

DMOの使命：持続可能な未来のデザイン
～その航路を照らす「観光地経営戦略」という羅針盤～ 5
佐藤 昌彦

シリーズ「地域コミュニティ」〈2〉

北海道における地域コミュニティの活性化に向けて
ー地域課題の解決に向けた新たな共創の取り組みー 9
（一財）北海道開発協会開発調査総合研究所

地方創生

第2期中標津町まち・ひと・しごと創生総合戦略 13
中標津町総務部政策推進課

脱炭素～北海道における再生可能エネルギー

白糠町における脱炭素への取り組み 17
白糠町企画総務部企画財政課ゼロカーボン推進係

ガストロノミックツーリズムin北海道

～食と文化の観点から地域を見つめ、北海道を学ぶ旅～ 第1話
「札幌」 21
遊佐 順和

「ほっかいどう学」第46回

北海道におけるタンチョウの現状～生態と保護の歴史～ 25
吉野 智生

インタビュー 飛翔のレシピ 35 ー豊浦町ー

自然環境とのつながり、人とのつながりのあるべき姿を
追求し地域でゆっくりじっくり生きていく 30
大橋 三千雄さん
かとう けいこ

地域おこし協力隊 第48回 ー根室市ー

根室市移住コーディネーターの挑戦
リアルを発信し、新しい人の活気を！ 32
飯田 雄貴

「活動報告レポート」ーオホーツクー

「さみーから、うめーんだ。オホーツク」を合言葉に
食の地域ブランド化に！ 34
OKHOTSK FOOD CONCERTO協同組合

もっと知りたいアイヌの心44

オルシクルマラット 36
佐賀 彩美

わが村は美しくー北海道 未来へつなぐ 第55回 ー江差町ー

日本遺産の町の伝統食を守る 37
えさし水土里の会

お知らせ

北海道インバウンドフォーラム開催のご案内 38
第47回 技術者交流フォーラム事業in網走 39
お知らせ 40



物流の2024年問題による輸送力不足について 北海道内の実態と対応策 ―持続可能な物流体制構築に向けた課題と展望―

経済産業省北海道経済産業局産業部産業振興課

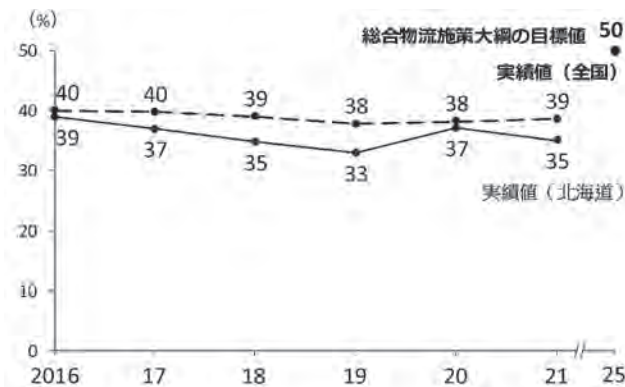
はじめに

物流業界は深刻な人手不足と効率性の低さという二重の課題に直面しています。特に2024年度から施行されたトラックドライバーの時間外労働規制によって生じる一連の課題は、所謂「物流の2024年問題」として広く認識されているところですが、とりわけ北海道は日本の中でも物流課題が多く、産業活動や地域経済に大きな影響を及ぼすことが懸念されています。

こうした背景から、経済産業省は2025年2月に「物流の2024年問題による輸送力不足の実態調査（以下、本調査）」を実施しました。本稿では調査結果のご紹介とともに、経済産業省北海道経済産業局（以下、「当局」）における今後の取り組みについて論じます。

第1章 調査の概要と目的

物流は、国民生活・経済を支える社会インフラとして不可欠ですが、積載効率の低さ（40%未満）や荷待ち・荷役時間の長さ（3時間超）、ドライバーの拘束時間は平均11時間46分など、効率性の面で大きな課題を抱えています（図1～2）。このため、経済産業省では関係省庁と連携し、荷待ち・荷役時間の短縮に向けた荷主事業者への支援等に取り組んでいるところです。



*積載効率＝輸送トンキロ / 能力トンキロ
出所）国土交通省「自動車輸送統計調査」、国土交通省「総合物流施策大綱（2021年度～2025年度）」

図1 営業用トラックの積載効率の推移



出所) ドライバー実態アンケート調査 (R6)
図2 荷待ちがある1運行の平均拘束時間と内訳

経済産業省では2024年問題による輸送力不足の実態を把握することを目的として、北海道内の業界団体会員事業者等を対象に実施し、約2週間の調査期間で74事業者から回答を得ました。

回答事業者の業種は製造業が42%と最多で、次いで林業(28%)、卸売業(12%)、小売業(6%)などが続きました。従業員数では50人以下の事業者が半数以上を占め、資本金では1億円以下の事業者が約7割を占めており、中小企業が中心となりました。

第2章 実態調査の結果

2-1 輸送力不足の顕在化

調査結果によると、回答事業者の53%が「物流の2024年問題」による輸送力不足が「顕在化している」または「どちらかと言えば顕在化している」と回答しました(図3)。具体的な影響としては、物流費の増

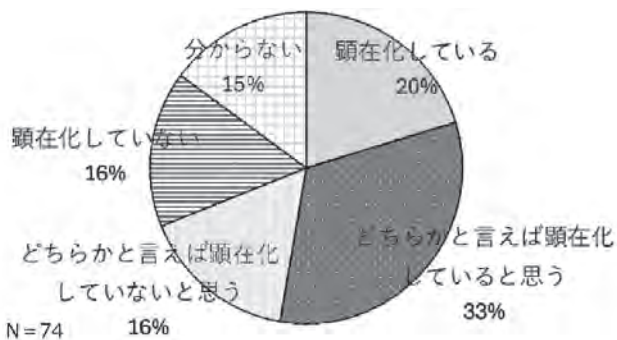


図3 トラックドライバーの時間外労働制限による輸送能力不足の顕在化の有無

加(71.8%)、輸送不能リスクの増加(59.0%)、輸送距離の制限(33.3%)、輸送回数の集約化(30.8%)などが挙げられています(図4)。

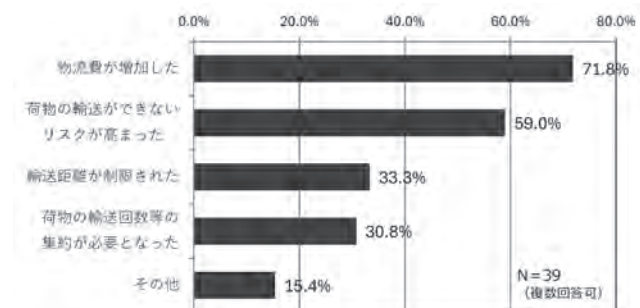


図4 2024年問題の顕在化の具体的な内容

2-2 輸送力不足の実感

回答事業者の3割以上が、2025年1月の状況について、前年同月と比較してトラックドライバーの確保に苦勞する、もしくは確保できなかったなど、輸送能力不足を実感したことが「かなりあった」「度々あった」と回答し、輸送力不足を実感する場面が多く報告されています(図5)。

具体的には、運送会社からの輸送拒否、依頼した車両台数への未対応、集荷・納品日の変更依頼などが挙げられています。

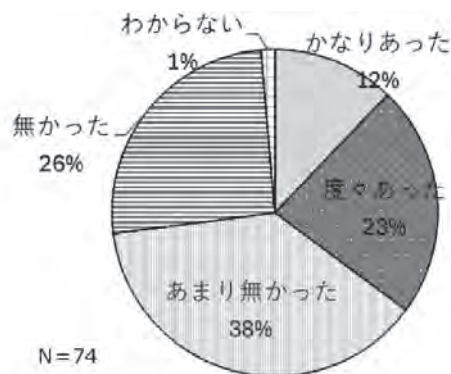


図5 輸送能力不足を実感した場面の有無

2-3 輸送拒否の事例

さらに、約1割の回答事業者が、時間外労働制限理由に貨物輸送を断られた経験があると回答しました。

拒否されたケースとしては、道東・道北から道央へ

の長距離輸送や、大型特殊車両による配送、休祝日や早朝到着を要する配送などが挙げられています。

2-4 道内荷主事業者の声

運送会社の価格交渉に応じる一方、燃料費高騰の影響により、ドライバーの賃上げに繋がっていないといった声が挙がっています。地方部の集荷・配送や長距離輸送が困難になり物流が停滞しつつある状況を踏まえ、北海道における今後の持続的な物流体制の構築に懸念の声が挙がっており、持続可能な物流体制の構築が急務となっています。

第3章 物流環境の課題解決に向けた制度的・面的対応

3-1 改正物流効率化法の施行

2024年問題への対応や輸送力不足への懸念等、社会的・経済的課題が顕在化していることを背景に、物流を「社会インフラ」として守るため、政府は2025年に「物流効率化法」を改正しました。

2025年4月1日より施行された改正物流効率化法では、荷主・物流事業者に対して物流効率化の努力義務が課されています。また、2026年4月に予定している改正法の施行では、一定規模以上の事業者に対する中長期計画の作成、定期報告、物流統括管理者（CLO）の選任が義務付けられており、国による指導・助言、調査・公表も今後行われることとなっています。

3-2 共同輸配送デジタルマッチング事業

第2章で述べた調査結果から見てきた北海道における物流課題を克服するためには、空車になっていることが多い帰り荷の積載率向上や荷物の混載といった「共同輸配送」を促すことも重要です。

当局は昨年度、デジタル技術を活用した共同輸配送のマッチング事業を行政として全国で初めて実施しました。事業期間中には1,743ルートが登録され、約5%のルートでマッチング希望があり、道央と地方間の約300ルートで共同輸配送の可能性が示されており、本事業は2025年夏以降も実施する予定です。

共同輸配送デジタルマッチング事業の概要(2024年度)

概要：システム上で共同輸配送のデジタルマッチングを促すためのサービスを提供するとともに、北海道内における輸送情報を集約化・データ化。

連携先：農林水産省北海道農政事務所、国土交通省北海道開発局・北海道運輸局、北海道。

事務局：(一社)運輸デジタルビジネス協議会(TDBC)。

事業期間：2024年12月12日(木)～2025年1月31日(金)。

システムの流れ：①輸送データ（出発地・到着地・輸送量等）を登録様式に入力・送付、②発行アカウントを用いて必要条件を入力しマッチング候補を検索、③検索で見つけた候補事業者について事務局に問い合わせ、④輸送情報を登録することで共同輸配送のマッチング候補事業者が見つかる。



図6 共同輸配送デジタルマッチング事業のイメージ

3-3 水産物流の効率化・標準化モデル事業

2025年度、当局の新たな取り組みとして、北海道の基幹産業である水産業の物流効率化及び地域フィジカルインターネット*の実現に向けた水産物流モデルの検討を行う予定です。

※ 物流リソースに関する情報を各種インターフェースの標準化を通じて、企業・業界の垣根を越えて共有し、保管・輸送経路等の最適化などの物流効率化を図ろうとする考え方。

水産物の生産地は地方に分散しており、大消費地である道央圏まで長距離輸送を余儀なくされています。また、水産物の統一的な荷姿の規格が存在しないことが、物流効率化のハードルになっています。そのため、水産物の荷姿等に関する標準化の可能性について整理を行うとともに、具体的な実証事例の創出を図り、持続可能な物流体制の構築を目指します。

これらの取り組みの成果はシンポジウム等のイベント開催を通じて、機運醸成に取り組んでまいります。

おわりに

物流の2024年問題は、単なる労働規制の問題にとどまらず、地域経済の持続可能性に直結する重要課題です。

第1章で述べた通り、課題が顕在化しつつある昨今、制度的・面的支援を進めることは急務となっています。北海道でこれらの物流効率化に向けた取り組みを推進することは、単なる地域課題の解決にとどまらず、日本全体の物流の未来を切り拓くモデルケースになる可能性を秘めています。

当局では、こうしたモデルケースの確立に向けて、関係省庁、民間事業者や経済団体、学識経験者等ときめ細やかな連携を図りながら今後も取り組みを進めてまいります。



DMOの使命…持続可能な未来のデザイン

その航路を照らす 「観光地経営戦略」という羅針盤



佐藤 昌彦 (さとう まさひこ)

一般社団法人 大雪カムイミントラDMO 副理事

旭川市生まれ、江別市出身。札幌西高等学校を経て明治大学商学部を卒業後、東京のファストフード店で勤務し、1990年に北海道庁入り。入庁後は主に経済畑、人事畑を歩み、2021年に北海道観光局長から上川総合振興局長に就任。2023年5月に道庁を早期退職し、今津寛介・旭川市長に請われて、6月から「旭川大雪圏域連携中枢都市圏」（旭川市と上川管内の中央部8町で構成）をエリアとする「一般社団法人大雪カムイミントラDMO（理事長：今津寛介）」の副理事長に就任。「今だけ、ここだけ、あなただけ」をキーコンセプトに、ATの推進など「持続可能で高付加価値な稼げる観光地域づくり」に取り組んでいる。ニックネームは前職に由来する「店長」。

私たちはこれまで、オーバーツーリズムという喫緊の課題に対し、その要因を多角的に検証し、「分散・分離・分割」という戦術の先にある「価値創造」にアプローチしてきました。今号では、その議論をさらに一歩進め、持続可能な未来をデザインするためのDMOの羅針盤——すなわち「観光地経営戦略」について、その在り方を自ら問い直していきます。

本稿で述べることは、あくまで私たちが現時点で思い描く姿であり、壮大で、時には青臭い理想論に聞こえるかもしれません。しかし、私たちはこの理想から目を背けることなく、多様なご意見に真摯に耳を傾けながら、一歩ずつ進んでいく覚悟であることを申し上げます。

私たち大雪カムイミントラDMOは、「マウンテンシティリゾート：旭川大雪」をスローガンに掲げています。北海道の屋根・大雪山連峰。その雄大な自然は「癒やしと潤い」を享受させてくれます。北海道第2の都市・旭川。その洗練された都市機能は「快適さと利便性」を提供してくれます。この二つが調和する“ここだけ”の特別な地で、観光は地域に何をもたらしすべきか——。私たちは、その問いに答え続けることこそが責任であり、持続可能な未来の姿を形づくる“デザイン”だと信じています。

しかし、前号で考察した「オーバーツーリズム」が顕在化し、蔓延してしまえば、この美しい景観や地域住民の暮らし、そして地域の本来の魅力そのものが損なわれかねません。

私たちが目指すのは、単に観光客を誘致することではありません。地域の本質的な魅力を未来へと守り、新たな価値を創造し育むことで、「訪れる人」も「住まう人」も喜びを分かち合える、「『住んでよし、訪れてよし』の持続可能な観光地」の実現——。その確かな基盤の上に立った時、すべての人が笑顔で過ごせる新しい暮らし“マウンテンシティライフ”がはっきりと見えてくるはずです。「マウンテンシティリゾート」という現在地。その先にある「マウンテンシティライ

フ」という未来——。この美しい未来を、この地域に関わるすべての人々と「共に創り上げ続けていく」という終わりのない挑戦。これこそが、私たちの使命であると固く信じています。そして、使命の先に見据えるビジョンこそが「心通わせるコミュニティの中で、一人ひとりの笑顔が満ち溢れる光景」であり、私たちが地域全体でデザインしていくべき「未来の姿」なのです。

1 持続可能な観光地域づくりとは（シビックプライドとツーリストシップという両輪）

それでは、この壮大な使命を果たすために、私たちは何から始めるべきなのでしょう。その答えは、私たちが目指す『住んでよし、訪れてよし』の持続可能な観光地域づくりの核心を理解することにあります。すべての人が笑顔で過ごせる新しい暮らし「マウンテンシティライフ」を地域全体でデザインしていくためには、観光がもたらす経済的な恩恵を地域へ還元するだけではなく、「訪れる人」も「住まう人」もすべての人たちが、一人ひとりの暮らしを深く尊重し、この地だけが持つ自然・文化・風土を未来へと守り育んでいく——この共有された決意という「核心」から、決して欠かすことのできない「2つの重要な柱」が、くっきりと姿を現すのです。

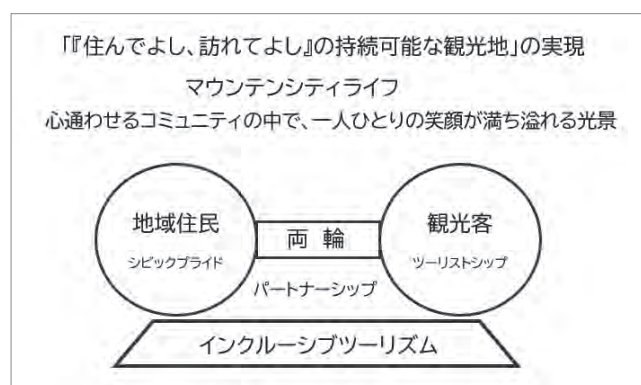
一つは、地域に住まう側の視点、「シビックプライド」の醸成です。それは、私たち住民が自らの地域に抱く、誇りと愛着、そして“自信”に他なりません。心からの「おもてなし」とは、この「シビックプライド」を源泉として、溢れ出るものなのです。さらに、観光客との良好な交流を通じて、私たち自身が、自らが暮らす地域の価値を再発見した時、「シビックプライド」は深化し、揺るぎない“確信”へと変わります。この確信こそが、「おもてなし」を成熟させ、唯一無二で持続可能なものとする原動力なのです。

もう一つは、地域を訪れる側の視点、「ツーリストシップ^{*1}」の促進です。それは、訪れる一人ひとりが「責任ある訪問者」として、その地域の自然や文化を

深く理解し、尊重する姿勢や行動に他なりません。そして、地域の価値に心から“共感”した時、そこから愛着が芽生え、確かな「絆^{きずな}」を育み、観光客を「交流人口」から、地域と共に生きる「関係人口」へと昇華させます。「ツーリストシップ」は、真の「パートナーシップ」を築き上げていくための原動力なのです。

このように「シビックプライド」と「ツーリストシップ」は、持続可能な観光地域づくりを進める両輪であり、その相互作用こそが未来を拓く原動力となります。そのうえで、私たちが常に忘れてはならないのが、「私たちは、誰ひとり置き去りにしていないか？」という根源的な問いです。シビックプライドを抱く地域で暮らす人々。この地を初めて訪れる観光客。この地の価値に共感するファン。あるいは、身体的バリアによって旅を諦めている高齢者や障がいのある方々。言葉や文化の壁を感じる外国人旅行者。そして何よりも、この美しい自然や文化を受け継いでいくべき、未来の主演である「子どもたち」。すべての人に想いを馳せ、誰もが輝ける場所を創造し続けていくこと。これこそが、私たちが推進すべき「インクルーシブツーリズム^{*2}」の真髄であり、この両輪が目指すべき目的地なのです。

そして、その実践こそが、「住んでよし、訪れてよし」の理想を現実のものとする、持続可能な観光地域づくりの揺るぎない根幹となります。



* 1 ツーリストシップ（旅行者が持つべき心構え）

旅先に配慮したり、貢献しながら、交流を楽しむ姿勢やその行動のことで、(一社)ツーリストシップが商標登録(一般言語化を目指す)。私たちDMOは、この理念が、住民の「シビックプライド」と響き合うことで、持続可能な観光地が実現すると考えている。

* 2 インクルーシブツーリズム(誰ひとりとも置き去りにしない観光)

旅行者の不安や障壁などを取り除くだけでなく、多様な人々や地域住民が共に尊重され、参加できる観光を目指す考え方。私たちDMOは、この理念が、「住んでよし、訪れてよし」の観光地を実現するための根幹と考えている。

2 持続可能な未来をデザインするための羅針盤（観光地経営と観光地戦略の共鳴軸）

私たち大雪カムイミントラDMOの使命——「マウンテンシティライフ」という未来——。この美しい未来を、この地域に関わるすべての人々と「共に創り上げ続けていく」という終わりのない挑戦。この挑戦には、確かな羅針盤が必要です。私たちは、その羅針盤が「観光地経営戦略」であると考えます。これは単に私たちだけの想いではありません。国（観光庁）も、DMOの登録要件として、科学的根拠に基づく「観光地経営戦略」の策定を明記しています。観光地経営戦略とは、DMOがマネジメントやマーケティング等を行うエリアが、中長期的（4～5年間）に目指すビジョン及びビジョンを実現するための具体的な戦略のことであり、まさに「未来をデザインする羅針盤」なのです。

では、その羅針盤はどのようにしてつくられるのでしょうか。その鍵は私たち自身の名前「DMO」に示されています。DMOとは、Destination Management / Marketing Organizationの頭文字です。最近では「観光地域づくり法人（DMO）」と表記されることが多いのですが、私たちは、この「M」が表す二つの「M」が持つ機能、すなわち「マネジメント（観光地経営）」と「マーケティング（観光地戦略）」こそが、互いを増幅させ合う「共鳴軸」となることで、観光地経営戦略が羅針盤としての機能を果たし、航路を照らすことができるのだと考えております。

【観光地経営：ビジョンを形にする、持続可能な基盤】

「心通わせるコミュニティの中で、一人ひとりの笑顔が満ち溢れる光景」——これこそが、私たちがこの地で実現したい“マウンテンシティライフ”の理想の姿です。このビジョンを形にするため、私たちは「観光地経営（ディスティネーション・マネジメント）」を推進します。それは、地域全体を一つの事業体として捉え、『住んでよし、訪れてよし』の持続可能な観光地」の構築に向けた、活動の基盤となるものです。

持続可能な観光地づくりは、行政はもとより観光事業者や関係団体、そして地域住民といった多様な関係者とともに、観光客の急激な増加が引き起こす地域社会や環境への負荷を軽減し、地域全体のバランスを保ちながら進めていく必要があります。私たちはその意思表示として、「JSTS-D（日本版持続可能な観光ガイドライン）」に登録しました。このガイドラインでは、観光地を環境・社会・経済の3つの側面から測定・評価し、改善していくことが求められています。正直なところ、ガイドラインが示すすべての基準、特に地域全体での連携を求められる項目をすぐに高いレベルで達成することは、決して容易なことではありません。私たちもそのハードルの高さを認識しています。だからこそ、私たちはJSTS-Dを完璧な達成目標として掲げるのではなく、地域の環境保全と利活用、住民生活の質の向上、経済活性化とオーバーツーリズムの未然防止・解消といったテーマに対し、地域全体で取り組んでいくための「共通のものさし」として活用しながら、着実に進めることを目指します。ビジョン実現に向けて重要なのは、この3つのバランスのとれた発展なのです。

また、持続可能な観光地づくりの真髄である「インクルーシブツーリズム」の実践も、言うまでもなく観光地経営の重要な柱です。私たちは「インクルーシブツーリズム」を、単なるアクセシビリティ改善（利用しやすさの向上）とは捉えていません。その先にある、「心通わせるコミュニティ」を創り上げることこそが、本質的なゴールであると考えます。その実現のため、すべての人が参加しやすい環境を整えることが大切です。私たちの地域では、自治体や関係団体、民間事業者などによるバリアフリー化や多言語対応など重要な取り組みが進められてきております。私たちDMOの役割は、このような方々としっかりと連携し、一人ひとりに地域の魅力を届けること。そして、観光による恩恵が広く地域にいきわたり、地域全体が活性化するように観光地経営をデザインしていくことです。その先に、本質的なゴールとして掲げた、私たちが地域に関わ

るすべての方々と共に創り上げる「心通わせるコミュニティ」が生まれます。そこには、一人ひとりが自分らしくいられる「居場所」があり、ここに関わることで自己実現さえできる、そのコミュニティこそ、「住んでよし、訪れてよし」が実現された、持続可能な観光地の理想の姿なのです。

【観光地戦略：共感から絆へ、持続可能な循環】

ビジョンを形にするためには、「観光地経営」によって活動の基盤を築くだけでは十分ではありません。私たちは、この地域が持つ素晴らしい価値を、多くの人々に知っていただく必要があります。地域の魅力をあまねく伝え、多様な人々との出会いを創出する誘客促進の重要性は言うまでもありません。しかし、私たちが推進する「インクルーシブツーリズム」の観点では、そのアプローチは単なる宣伝広告や無差別な集客行動とは明確に一線を画します。それは、データ分析といった科学的根拠に基づき、この地の価値——マウンテンシティライフ——を心から尊重し、深く「共感」してくれる「共創のパートナー」を見つけ出すための戦略なのです。

ここで言う「共創のパートナー」とは、地域と共に未来を歩む可能性を秘めた人々たちを意味します。ツーリストシップを理解・実践し、地域の価値に「共感」し、その一つ一つの共感を紡ぎ、「愛着」で染め、確かな「絆」を織り上げていきます。その結果、観光客としての「交流人口」から、地域と共に生きる「関係人口」へと昇華し、「シビックプライド」を共有する「心通わせるコミュニティ」の一員となっていくのです。

この「共感」を紡ぎ「絆」へと織り上げる循環のプロセスこそ、もう一つの「M」、すなわち「観光地戦略（ディステーション・マーケティング）」の真髄です。絆で結ばれた人々がもたらす新しい視点や活力、経済的な恩恵は、再び地域を潤し、新たな魅力を創造する源泉となります。共感が絆を育み、絆が地域を豊かにし、豊かになった地域がまた新たな共感を呼

ぶ。この絶え間ない好循環を生み出すことも、私たちの役割と言えます。

さらに、「観光地戦略」から得られる科学的根拠は、「観光地経営」のデザインそのものにフィードバックされ、基盤をより強固なものへと進化させます。「観光地経営」という確かな基盤と、「観光地戦略」による循環。この二つの力が相互に作用し、進化し続ける好循環を生み出すこと。それこそが、私たちの羅針盤となる『観光地経営戦略』なのです。「観光地経営」と「観光地戦略」。この二つが強く共鳴し合う時、私たちの羅針盤は「マウンテンシティライフ」という未来へ向け、その航路を確かな光で照らし出します。

【北海道の真ん中で、未来の暮らしをデザインする】

北海道の屋根・大雪山連峰の麓に広がる、雄大な自然と洗練された都市機能。その二つが調和する北海道の「真ん中」。「ハートオブ北海道（The Heart of Hokkaido）」と呼ぶべきこの地なら、誰もが夢見る「新しい暮らし」を形にできるはずです。

私たちが申し上げてきたことは、理想論に過ぎないのかも知れません。実際の取り組みの中で、時には厳しいご意見をいただき、反省や見直しの場面も多く、試行錯誤の連続です。それでもなお、この地に暮らす人、この地を愛するすべての方々と共に、持続可能な未来をデザインするため、「観光地経営」と「観光地戦略」——この二つの柱を両輪として機能させながら、地域の価値を守り、高めていく航海を続けてまいります。

今ここに生きる私たちだけでなく、次の世代にも誇れる地域であり続けるために…。



北海道における地域コミュニティの活性化に向けて —地域課題の解決に向けた新たな共創の取り組み—

第2回

『持続可能な町内会に向けたシンポジウム「どうする?!町内会」』 パネルディスカッション「これからの町内会の進むべき途」(後編)

当シリーズの第2回目として、前号に引き続き、地域コミュニティの基本である町内会をテーマに、今年2月に開催された旭川市でのシンポジウムにおける後半のパネルディスカッションの概要をご紹介します。

2025年2月14日に旭川市役所内にて開催（主催：旭川市立大学地域連携研究センターおよび旭川市）

【基調講演】

「町内会の維持・活性化のために何が必要か」

大野 剛志（おおの たけし）

旭川市立大学保健福祉学部コミュニティ福祉学科教授
旭川市立大学地域連携研究センター所長

【学生による調査報告】

旭川市立大学保健福祉学部コミュニティ福祉学科
大野剛志ゼミナールの学生

【パネルディスカッション】

「これからの町内会の進むべき途」

■コーディネーター

松岡 昌則（まつおか まさのり）

旭川市立大学保健福祉学部教授
北海道大学名誉教授／秋田大学名誉教授

■パネリスト

武岡 明子（たけおか あきこ）

札幌大学地域共創学群（法・政治学系）教授

小内 純子（おない じゅんこ）

札幌学院大学法学部教授

（令和7年4月より同大学名誉教授）

片山 めぐみ（かたやま めぐみ）

札幌市立大学デザイン学部准教授

※ シンポジウムの概要等を以下に掲載しています。

<https://www.asahikawa-u.ac.jp/post-news250219-30250/>

<テーマ2：町内会の維持・活性化のために必要なこと>

松岡（コーディネーター） 町内会は、同じ地域に住む人々のつながりを深め、住みよい地域をつくるという共助の役割を担っていますが、若い世代にも理解してもらうためには、どういったことに取り組めばいいのでしょうか。

武岡 これまで町内会は「誰もが入るもの」「地域におけるあらゆる活動を引き受けるもの」とされてきましたが、こうしたことはもはやできないと思っています。そして、住民側もそこまで求めていないという地域が多いのではないかと思います。これからは「やりたい人がやりたいことをやる」「できる人ができることをやる」ということを許容していかなければ、町内会は維持できなくなってしまう。



そして、住民側もそこまで求めていないという地域が多いのではないかと思います。これからは「やりたい人がやりたいことをやる」「できる人ができることをやる」ということを許容していかなければ、町内会は維持できなくなってしまう。

事例で紹介しますと、東京都港区の「お台場合同自治会」は、会費も活動の義務もない町内会です。賃貸マンション5棟が集まり、2013年に結成されました。結成のきっかけとなったのが、2011年の東日本大震災で、このときは町内会がなかったので、住民の安否確認ができなかったそうです。それはよくないということで町内会を結成し、住民の約6割にあたる500世帯が会員になっています。会費を集めていないため、リサイクル資源を回収して得られた収入や港区からの報奨金を財源として、夏祭りやハロウィンなどのイベントを行って、ゆるやかなつながりを築いています。

また、こうしたイベントを行うだけでなく、住民の意見を集約して代表することも町内会の大事な機能の

一つです。例えば、行政に意見を伝えるときに、一個人で行っても話を聞いてもらえませんが、6割の加入率がある町内会是一种の地域代表としての地位を持ち得ていることから、行政に話を聞いてもらえます。加入率が下がったとはいえ、行政に何か物申すときにも町内会は役に立ちます。港区ではシャトルバスが住民の生活の足になっていますが、利用者が減り港区から補助金が打ち切れそうになりました。このとき、「お台場合同自治会」は自治会連合会を通じて要望書を出し、シャトルバスを継続することができたそうです。

札幌市中央区の「サッポロレジデンス町内会」は、札幌駅に隣接した20階建ての分譲タワーマンションです。都心部にあるので、人間関係が希薄と思いきや、ゆるやかに適度な距離感で住民同士のつながりを築いています。マンション1棟で一つの町内会をつくっていて、総戸数235戸のうち220戸が会員で、約9割の加入率があります。豊平川の花火大会のときは、屋上を開放して子どもたちにお菓子を配り、週1回健康体操教室もしています。このゆるやかなつながりが生きたといわれたのが胆振東部地震のときで、有志の方がエントランスで炊き出しをしたり、ひとり暮らしの高齢者のところに食事を届けたりして助け合ったそうです。ここでは以前から有志の方が「来たいときに来て、帰りたいときに帰る」「食べ物は持ち寄る」といった新年会を行っていたということです。

私はさきほど、やりたい人がやりたいことをやるという町内会があってもいいといいましたが、こういうことをいうと自治体の職員はとても嫌がると思います。なぜなら自治体は町内会にいろいろな仕事をしてもらっているのです、それができないといわれると困るからです。ですが、これだけ加入率が下がり、担い手も減り、町内会長や役員に負担が集中している中、これまでのように行政の下請け機関という役割を続けていける町内会は多くないと思います。そもそも、自治体が委託する業務が多すぎることで住民から町内会は何をしているのかわからないと思われるだけでなく、公的な組織だと思っている人もいて「私には関係ない、必要ない」と、町内会離れの原因になっているのではないかと考えています。できるだけ行政の仕事

は少なくして、地域ごとの課題に住民自身が向き合えるようにしていくことが大事だと思います。

町内会は強制加入団体ではないという最高裁の判例もあり、もはや町内会に入ることは当然ではありません。このような状況下で、住民に町内会に入ってもらうためには、「仕掛け」が必要です。例えば、生活する上で誰もが関係すること、ごみやりサイクル、除排雪などが、その仕掛けになり得ます。札幌市東区の「東かりきひかりの町内会」は、新しい分譲住宅地で子育て世帯が多く住んでいますが、最初は町内会が結成されておらず、越してきた人はごみステーションがどこにあるのかわからず、次第に辺りが荒れてしまったそうです。これではいけないということで、一から町内会を立ち上げたということです。

これとは逆に、自治体が直営でごみステーションの管理等をしている地域では、町内会加入率が低かったり、あるいは町内会の解散が増えたりという傾向にあるようです。例えば、中標津町は町内会加入率が33.51%（2025年1月末）で道内ワースト1ですが、ここでは町がごみステーションと街路灯の管理をしています。住民がこれらの管理をしなくてもいいことが、町内会の必要性を感じにくくさせているのかもしれませんが。行政からの依頼事務や充て職が町内会にとって負担になっているので、その見直しは必要だと思いますが、住民自身で地域課題を解決していくための「仕掛け」として残しておくべきこともあるのだろうと考えます。

また、町内会はこういうものだという従来の考えも変えていかなければならないと思っています。例えば、地元の神社への奉賛金を町内会費から出しているケースは多いのではないかと思います。ですが、地域には様々な信仰を持つ住民がいることを考えると、これは適切ではないといえます。昨年6月、旭川市の弁護士会は、市内の町内会に対して、神社への奉賛金の支出をやめるよう勧告を出したと聞いています。さらに、町内会のイベント等で男性陣がお酒を飲んでいる裏で、女性陣が料理をしたり、配膳をしたりということがみられますが、こうしたことも今後はやめていくことをおすすめしたいと思います。

地域住民皆が楽しいと思える町内会をつくって

いってほしいと思っています。



片山 私は、市町村などからまちづくりの提案を頼まれる際、大抵座談会を開催するのですが、行政に地域の人を集めてくださいとお願いすると、いつも同じメンバー

しか集まらない傾向があります。ですから、地域の人材をいかに発掘するか、育てるかということが課題だと思っています。そこで提案は、先に話したマルシェです（前号参照）。何かワクワクすることをしないと、地域に眠っている人材や、その人たちが生き生きしているところをみることはできないと思っています。町内会でマルシェや朝市をしているところがあれば、ぜひ、こういう視点で取り組んでみてほしいです。

私の大学は札幌市南区芸術の森という地域にあって、ここで「八百カフェ」というマルシェが開催されています。これは学生が授業の課題で提案した企画ですが、この企画を実際にやってみたいといわれました。ちょうどそのとき、10年くらいお付き合いのある朝市をしている女性が、コロナ禍で朝市をする場所を失い、再開する場所を探していたので、大学のキャンパスを借りてマルシェをすることにしました。それがあれよあれよという間に大きな活動になり、一昨年、STV「さっぽろふるさと再発見」という番組で紹介されました。

マルシェは、5～10月の第1日曜日の午前9～11時に開催しています。出店やパフォーマンスへの希望者は40件くらいで、来場者は毎回200～400人います。子どもたちがお小遣いを持って買いに来るので、お店の商品ひとつひとつの単価は安いですが、売り上げは大体20万円程度です。実行委員会は運営資金として売り上げの5%を申告制でもらっています。参加者は地域住民、近隣の農家さん、商店だけでなく、最近は医療福祉専門の職員が介護予防の講義に来て、健康相談や健康体操を行っています。彼らは普段仕事をしている施設内だけではなく、より多くの地域住民の健康増進活動に関わりを持ちたいと思っていて、こういう

ことをアウトリーチ^{*1}といいますが、それにぴったりの場だと思っています。

私はこれとは別に、学校に通っていない子どもたちが行くフリースクールの手伝いをしていますが、その子どもたちがいろいろな趣味を持っていたので、試しに趣味の編み物をマルシェで出店してみることにしました。そうしたら2時間で2万円の売り上げになりました。こうしたお小遣い稼ぎは、人の意欲が掻き立てられるのだと思います。人と関わることが苦手で社会とつながりのなかった子どもたちが、マルシェでの出店を通じて、どんどん成長していくようになります。

マルシェは関わる人たちの自己肯定感が向上したり、人間性がみえたりして、人材発掘のできる場です。地域の町内会でもマルシェのことを住民に声かけしてくれるようになって、〇〇さんと〇〇さんが出店したいといったと情報をくれたり、地域に関わりのあるいろいろなところとの連携がはじまっています。そういう関係性ができくると、例えば、マルシェの会場の雑草がのびているから誰か草刈りしてくれないかなといったと、開催日前日には草がきれいに刈られていたり、その他にもいろいろなお願いを聞いてくれたりするようになります。人は役割を与えられることを実は必要としているので、何かお願いをするにしても、楽しいとかワクワクするような充実感があると、それがスムーズにいくということを、この活動を通して実感しています。

小内 私の住んでいる町内会の話をします。会員は57戸で、加入していないところが8戸あり、加入率は87.7%です。80歳以上が20人以上いて、超高齢化して



います。会費は月600円で、1年間分を一括で集金しています（この中には街灯費と除排雪費が含まれます）。非会員からも街灯費と除排雪費は徴収していて、これは持参か振込にしています。江別市は生活道路に関しては、除雪はしてくれますが排雪はしてくれないので、それにかかる費用を市と町内会で折半して

*1 医療や福祉の分野では、病院や施設から地域に出て、患者や当事者のところで活動することを意味する。

います。年1回の除排雪にかかる費用は、町内会でなければ市は補助してくれないので、これが町内会解散の歯止めになっていると思います。

さきほど話したように、会員が高齢化しているので、役員のなり手が少ない状況があり、2023年に私は総務を担当することになりました。そして、役員の任期（1年間）が終わったと思ったら、今度は輪番制の班長がまわってきて、4、5月の班長は町内会費を集金しなければならないので、とても大変でした。

本日、会場にいる町内会役員をされている皆さんは、それぞれ負担に思うことが違うだろうと思いますが、私が役員をして負担に感じたことは、広報誌や回覧板の仕分けと、町内会費の集金でした。ですので、これらの負担軽減策を考えてみたいと思います。全国統計になりますが、（公社）日本広報協会の「自治体広報誌の配布方法（2023年度）」によると、広報誌配布について自治体・町内会を主に利用しているのは73.0%と一番多いですが、利用しないが22.9%となっています。では、どうやって配っているのかというと、シルバー人材センターや広報誌配達委員、発送業者等を利用して配布しています。広報誌配布は町内会を介さなくても、むしろ専門業者に依頼した方が町内会に加入していない世帯も含めて100%に届くと思います。費用の問題はあるかもしれませんが、こういうことを考えてもよい時代になっていると思います。

次に、集金に関しての負担軽減策として電子決済がありますが、その事例を紹介します。「釧路昭和中央6丁目町内会」は、若い子育て世代の会員220世帯の町内会ですが、町内会費のコンビニ払いを導入しています。さらに回覧板は、町内会公式LINEをつかっています。ただ、こうしたコンビニ決済やLINEには利用料金がかかります。この町内会は、子ども祭りをする等、活発に活動しているので、そこで得た収入があるからできているのかもしれませんが、全ての町内会ができるとは限りません。総務省の「自治会等に関する市町村の取組についてのアンケート調査（2021年）」によると、自治会等のデジタル化への市町村の支援については、「支援していないし、予定もない」が84.9%となっています。町内会等へのデジ

タル化に対する行政のサポートは進んでいない状況となっています。コロナ禍を契機にSNSの活用を検討する町内会が増えていますが、費用負担の問題から導入が難しいという町内会もあり、こうしたところに行き行政からの効果的な支援が必要だと思っています。

私自身の町内会役員の経験も含めて、町内会が存続していくために必要なことは、町内会役員をしている皆さんが一番負担だと感じていることを、どう軽減していくかを考え実行することだと思います。自治会・町内会に加入している人を対象にしたインターネットリサーチ^{*2}では、自治会・町内会の活動で感じるストレスの圧倒的1位に「役員になること（39.2%）」が挙げられています。役員になった人の負担を少しでも減らしていくためにも、町内会の活動を今一度見直すことが持続可能な町内会にとって重要なことだと思います。

松岡 町内会衰退の要因としては、町内会の役割が見えにくい、役員の負担が大きいことが挙げられています。



今日の町内会は、世代構成や産業構造など地域の特質に合わせて、地域住民が求めているものを整理した上で、優先的な課題に絞って取り組むことが重要です。また、人々が参加しやすい仕掛けも重要です。マルシェなど、特定の目的を持ったサークルや団体と連携を図っていくことにより、地域活動の役割を実感していけるのではないのでしょうか。

本日の議論を参考に、それぞれの地域でゼロから考え直し、取り組みを再開していただきたいと思います。

※ パネリストの武岡氏、小内氏、片山氏は、当研究所の「北海道における地域コミュニティに関する研究会」の構成委員です。

^{*2} (株)AlbaLinkが運営する訳あり物件買取プロが、自治会・町内会に加入している477人（女性279人／男性198人）を対象に「自治会・町内会に関する意識調査」を実施（インターネットによる任意回答）。

第2期中標津町まち・ひと・しごと創生総合戦略

中標津町総務部政策推進課

1 はじめに

今年5月にHBC北海道放送により「人口約2万人の町で“ホテルラッシュ”」として中標津町が紹介されました。現在、大手乳業メーカー2社が町内で大規模工場の新設・更新を進めており、その工事関係者の宿泊需要を見込んだ事業者等が町内で続々と宿泊施設の建設を進めています。また、2024年に中標津町内で新設された会社数は2005年以降最多の30社に上り、今後は前述の大規模工場建設も更なる地域経済活性化に追い風となると期待されています。

中標津町は、北海道の東部、世界自然遺産の基部に位置する人口約22,000人の町であり、根室地域のほぼ中央に位置する地理的条件や、札幌・東京と道東をつなぐ中標津空港の存在により交通の要所となっている町です。知床の山並み、広大な酪農風景、少し足を延ばせば世界自然遺産の知床や、阿寒摩周国立公園等の豊かな自然環境に恵まれ、産業では、全国有数の酪農の町でありながら、根室地域の経済の中心として中小の店舗はもちろん近年の大型スーパーや有名チェーン店等の出店により商業施設も充実しています。また、地域センター病院である町立中標津病院、国・道の出先機関等の都市機能の集積もある事で、仕事や買い物等で訪れる近隣市町村の住民をはじめ、様々な人たちが集まる地域の交流拠点になっており、その商圏人口

は町の人口を大きく上回り8～10万人とも言われています。中標津町がここまでの商圏を持つのは根室地域や釧路・オホーツク地域の一部が釧路市・北見市の人口10万人都市から距離が遠く、中標津町を中心とした商圏が形成されている事にあります。

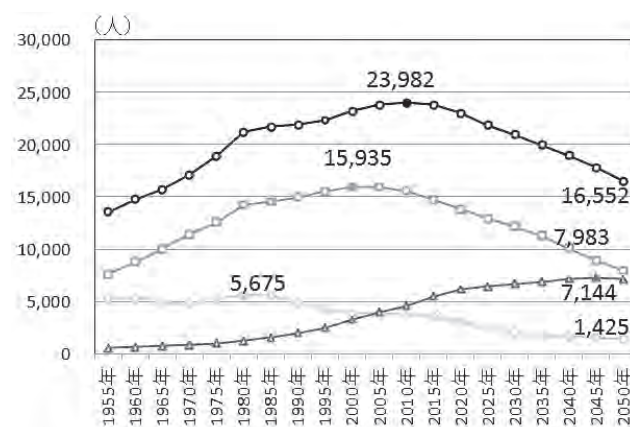
小売の年間商品販売額は道内町村の中では1位であり、現在も大型スーパーや有名チェーン店等の商業施設の出店が続くとともに、前述の大規模工場の新設・更新の影響により更なる地域経済活性化が期待される商業のポテンシャルが高い町です。また、観光面ではランドマークである開陽台がある他、町の周囲には有名観光地が数多くある事から、広域観光の拠点としても高いポテンシャルを秘めている町でもあります。

2 人口推移と基本戦略

中標津町は2012年までは人口が増加していた町でしたが、国勢調査では2010年の総人口23,982人をピークに人口減少に転じ、2020年には総人口23,010人となっています。国立社会保障・人口問題研究所（社人研）の2023年推計によれば、中標津町の人口は2050年で16,552人まで減少するとされており、道内市町村の中では人口減少の進行は緩やかではあるものの、町は最重要テーマとして人口減少対策に取り組んでいく必要があると考えています。



人口10万人都市から半径50kmの円と中標津町



人口の推移と推計（国勢調査、社人研推計より）

中標津町の人口減少が緩やかである最大の理由は、前述した人が集まる拠点性と、根室地域が全国有数の一次産業生産額を誇っており、中標津町がその消費地として受け皿になっている事にあり、企業活動や投資が活発に行われているためです。言い換えれば中標津町は近隣市町村とともに発展してきた町であり、地域一体となって活性化する事が極めて重要であると言えます。そのため、近隣市町村同士で人口を奪い合うのではなく、いかに地域の産業と中標津町の拠点性を維持・強化しつつ、都市部に一極集中する人材にこの地域に目を向けてもらえるかが、社会増減対策において重要な考え方となります。

また、自然増減対策においては、全国的に若年女性が都市部に流出する傾向にあります。中標津町でも同様であり、これにより子育て世代自体が減少している事に加えて婚姻率の減少傾向もあいまって近年出生数が大きく減少しています。全国的に言われている事ではありますが、中標津町も結婚している女性が出産する子どもの数は過去から大きく変化はないため、出生数の減少を防ぐ意味でも都市部への一極集中の是正、特に若年女性においてその対策は非常に重要だと考えています。

人口減少の影響は中標津町における働き手不足に波及しており、町の拠点性や地域の産業等の「基盤」を整えつつ、この基盤を維持するためにも都市部をはじめとした地域外から人材（特に若年女性）を確保する「手段」を構築していく事が、中標津町の人口減少対策における基本的な戦略となります。

3 第2期中標津町まち・ひと・しごと創生総合戦略の概要と取組事例

これらの背景を踏まえ、中標津町では3つの基本目標と、その中で特に重点的に取り組むべき施策として「特化対策」を設定し人口減少対策に取り組んでいます。主に特化対策が「手段」の構築にあたるため焦点を当てて紹介します。

【基本目標1】多様なつながりで活性化するまち(雇用・活性化)

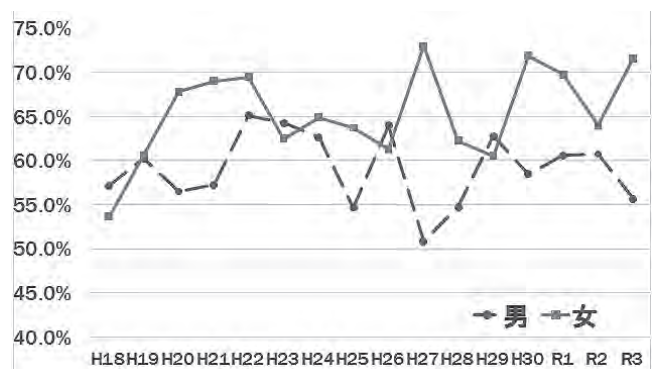
【特化対策】女性の社会参加の促進

この特化対策は『女性の社会参加の促進に向けた仕組みづくり、体制づくりに取り組むとともに、若年女性の転出傾向が高まっている原因を調査し、その対策を検討する』ものとして設定しています。

具体的な取組としては、中標津町の女性活躍を推進し女性に選ばれる地域となるため、アンケート調査により町内事業所の雇用形態や女性活躍推進に係る取組等について現状把握を行うとともに、男女間の無意識の思い込みの解消に向けたフォーラムを開催し意識醸成を図っています。

また、若年女性の転出傾向が高まっている原因調査については、統計データや各種アンケート調査結果等により、高校卒業後に6～7割の学生が大学等に進学し高学歴化が進んだ一方で、大学等卒業者が魅力的に感じる企業が中標津町内に少なく、大学生等の町外在住者を対象とした採用活動に積極的な町内企業も少なかった事が最大の要因であり、男性よりも女性の方がその傾向が顕著であるためと分析しています。

つまり、今いる中標津町の若年女性が活躍の場がなく町から出て行っている数が多いのではなく、ほとんどの若年女性が進学等で一度町を離れる中で、大学等卒業後に中標津町が選ばれにくい傾向があるのが原因であり、地域における女性の活躍推進に加え、若者・女性に魅力的な雇用の創出や、都市部等の地域外から人材確保するための情報発信が必要であると考えています。



大学・専修学校への進学率推移（学校基本統計より）

【基本目標2】結婚し子どもを産み育てたいと思えるまち（結婚・子育て）

【特化対策】若い世代の結婚支援

この特化対策は『基幹産業を支える農業青年をはじめ、民間との連携により若い世代がパートナーと出会う場の創出に努め、結婚機会の創出を図る』ものとして設定しています。

具体的な取組としては、中標津町内での婚姻率上昇を目的として、酪農後継者対策としての出会いの場の創出や、20代・30代の道東在住者を対象とした若者交流イベントの企画・運営等を行っています。若者交流イベントは当初婚活イベントとして実施していましたが、人口規模が少ない地域においては婚活イメージが受け入れられにくく女性参加者が少なかったため、現在は若者の交流の場を創出する方針に転換して参加者増加につながっています。若者交流イベントは中標津町民のみならず近隣自治体からの参加者も多く、中標津町を「若者が集まる町」としてブランディングを図り、若者同士の交流を促進するとともに、若年層の中標津町に対するイメージを改善する事を次の展開として考えています。

【基本目標3】愛着を持ち、住みたくなる、戻ってきたくなるまち（定住・愛着）

【特化対策】高等教育機関の誘致・充実

この特化対策は『高校卒業後の進学先となる高等教育機関の誘致に努めるとともに、町内進学への促進に向けた教育環境の充実に努め、進学による都市圏への人口流出を抑制し、あわせて15～19歳の男女の転出が多い潜在的な原因を調査し、その対策を検討する』ものとして設定しています。

根室地域ではこれまで高校卒業後の進学先がなかったことから、高校卒業後にほとんどの学生が進学等で町を離れていましたが、町内団体と連携した誘致活動の展開により2024年4月に学校法人岩谷学園が運営するひがし北海道IT専門学校が中標津町内に開校しまし

た。開校したばかりであり現時点で学生数の充足には至っていませんが、今後は高校卒業後の進学先の一つとして若者減少の抑制が期待されています。

15～19歳の男女の転出が多い潜在的な原因は前述のとおり若者の大学等進学に対して雇用の魅力や町外への採用活動が不足していると分析しており、専門学校開校による機会を活かしつつ、並行して一度町を離れた若者を対象としたUIJターン対策を進める必要があると考えています。



2024年4月に開校したひがし北海道IT専門学校

4 新たな人口減少対策に向けた方針

現在中標津町では、これまでの取組や分析結果を踏まえて新たに3つの方針を設定し、都市部から人材（特に若年女性）を確保する新たな「手段」の構築を進めています。

1つ目は『若者・女性に魅力的な雇用の創出・情報発信』です。今年2月に中標津町は人材総合サービス会社の株式会社ネオキャリアと株式会社ふるさと開拓ラボとの3者による、持続可能な地域社会の発展と新たな地域活力の創出を目的とした包括連携協定を締結しました。人材採用・育成支援において豊富な知見を有する企業との官民連携により、中標津町における雇用創出や人材定着、DXの推進等を図っていく事を目的としたものであり、持続可能な地方創生のモデルを構築していく事を目指しています。また、あわせて町が認定した事業所に正社員として就職した人を対象とした奨学金返還支援制度を新たに創設しており、町内事業者への町外人材募集のノウハウ等の支援と、就職者に対する経済的支援を組み合わせる事により、若者をはじめとしたUIJターン対策を推進しています。



(株)ネオキャリア・(株)ふるさと開拓ラボとの連携協定

2つ目は『若者・女性に選ばれる地域づくり』です。これまで進めてきた若者交流の促進や女性の社会参加の促進を継続するとともに、若者が地域を知り・関わる事で一度町を離れても戻って来たいと思えるよう、幼少期～高校生、若手社会人や新たに中標津町内に進学する専門学生も含めて、まちづくり活動に参画する場の創出を進めています。具体的には、若者がまちづくりについて話し合う場の創出や、若者が交流し賑わう事ができるイベントを若者自身が企画・運営する取組の準備を進めています。また、現在策定を進めている第7期中標津町総合計画の後期基本計画と第3期総合戦略においては、策定に携わる町民委員に若者・女性に多く参加いただいております。若者・女性の視点を踏まえたまちづくりを目指しています。

3つ目は『子育て環境の充実』です。「出生数の増加」や「仕事と子育ての両立」を図る事を目的として、今年9月から保育料負担軽減を強化し、現在の3～5歳児の保育料無償化に加えて、0～2歳児の保育料を第1子半減・第2子以降無償化とする事を予定しています。これにより、出産後の女性の会社復帰や再就職等も期待しているところであり、町内の女性活躍や働き手不足対策も見据えた施策として実施しています。

また、町内の働き手不足により地域産業等が衰退し「基盤」が弱くなる事を防ぐため、中標津町では外国人材の活用を推進しています。2021年には中標津町内

に日本語学校が開校しており、その留学生に対する経済的支援や、留学生・就業者確保に向けた海外往訪プロモーション、多文化共生に向けた外国人と地域住民との交流イベント等を実施しており、2020年には100人程度だった外国人人口は、今年5月末時点で350人を超える等、外国人に選ばれる町としても取組を進めています。町内事業所における外国人雇用も徐々に増加しており、飲食店や介護事業所等の様々な場面で外国人材が活躍し、地域活力の維持に貢献しています。

5 おわりに

第2期中標津町総合戦略は今年度が最終年度であり、中標津町では現在、これらの取組を踏まえた第3期総合戦略の策定を進めています。現在中標津町は、これまで述べた投資拡大やIT専門学校開校、外国人増加等に加え、全国的なAI技術の発展やデジタル化の浸透等の大きな変化の中にあり、こうした変化に適應するとともに機会を逃さず、地域が一体となって活性化できるよう、全国有数の一次産業や地域の拠点性等の強みを活かしたまちづくりを展開していきます。

白糠町における脱炭素への取り組み

白糠町 企画総務部 企画財政課 ゼロカーボン推進係

1 白糠町の概要

白糠町は北海道の東部、釧路市の西隣で南は太平洋に面した、漁業と農業そして酪農が盛んなまちです。太平洋沖の暖流と寒流が交わる絶好の漁場を有し、1年を通じて様々な海産物が水揚げされます。中でもシシャモや毛ガニ、ヤナギダコ、ツブ貝は、高い評価を受け、お土産としても人気です。さらに、今や全国区となった「しそ焼酎^{たんたかたん}鍛高譚」をはじめ、イタリアンチーズや羊肉、ヨーロッパでは高級食材とされる鹿肉も生産しています。年間の日照時間の長さや冷涼な気候、森や川、そして海の自然がもたらす豊かな“食材”が自慢のまちです。

また、移住・定住・子育てサポート・住宅政策など総合的な施策を展開し、ゆとりある新生活と健やかな子育てを応援しています。“太陽の手”子育て支援は、「出産祝い金の支給」「18歳までの医療費の無料化」により、地域を挙げて子どもたちの成長を見守り、出産・医療面をサポートし、保育・教育支援は、保育から進学まで子どもたちの成長と学びをバックアップ。「すべての子どもの保育料・給食費無料化」「新入学児童・生徒入学支援金の支給」を実施し、子育て世代から好評をいただいております。

住宅政策についても、移住・定住を希望する方にゆとりある生活を送ってもらえるよう万全な支援体制に注力し、「空き家バンク制度」「太陽のまち定住奨励助成事業」「新築住宅固定資産税の減額」など安心して暮らせる基盤の整備を重点としております。

2 白糠町が取り組む環境施策

～3C (Challenge Change Chance)

○ 人類が地球を温暖化させている

私たちは当たり前に電気やガス、灯油などのエネルギーを使って暮らしています。白糠町に限らず北海道ではガソリンを燃料とする車も生活に欠かせません。世界の科学者の知見をもとに気候変動を分析するIPCC（政府間パネル）の第6次評価報告書では「人間の活動が地球を温暖化させてきたことは疑う余地がない」と明言しています。私たちが排出する温室効果ガスが気候変動を加速させ、地球規模で大きな変化を与えているのです。

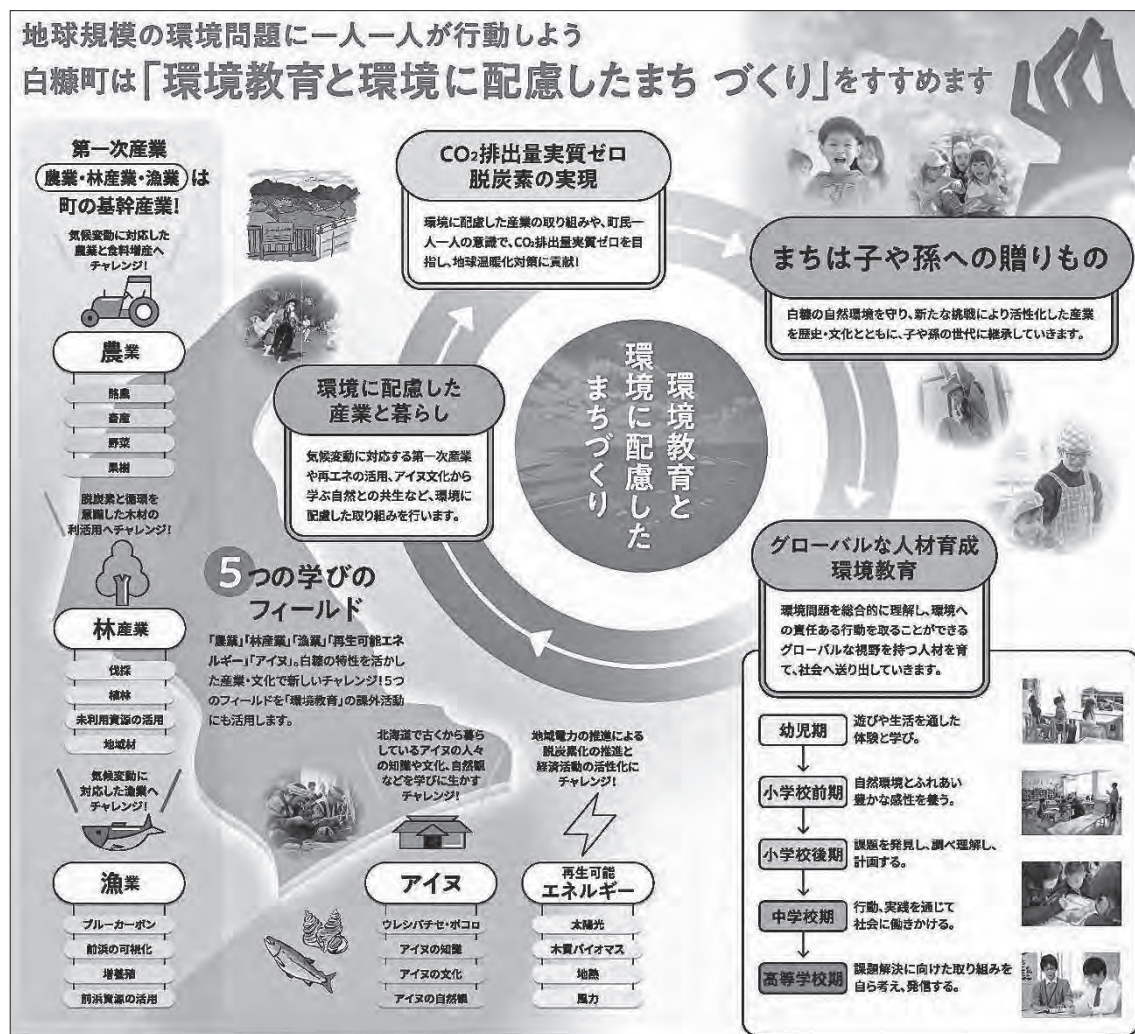
○ シロクマが消える！北極の危機

地球の中で最も温暖化が進む北極圏では、海を覆っている氷が年々縮小しています。このままでは、ホッキョクグマなどの野生動物と、極寒の環境に適応してきた数万の生物種は絶滅の危機に瀕する可能性があります。これは地球規模で進んでいる危機の一例にすぎません。目の前の脅威に向き合い、明るい未来を手にするために、白糠町は挑戦を続けます。

○ 地球環境の危機に白糠の新たな挑戦！

いま世界は、パンデミックや紛争、食料問題、激甚化する自然災害、止まらない地球温暖化など、様々な課題を内包しながら大転換の岐路に立っています。中でも温暖化対策は人類が取り組むべき急務です。地球規模の話となると、他人事と考えてしまいがちですが、自分の生活に大きく影響する身近な問題として捉え、町民一人一人ができることから行動することが非常に大切です。

世界的にCO₂削減に取り組んでいる背景を踏まえて、白糠町のまちづくりの三本柱である「第一次産業の再興と振興」「町民の健康づくり」「教育（意識改革）」に、“環境”を加え、まちづくりの理念を再構築しました。白糠町は「環境教育と環境に配慮したまちづくり」を



推進していきます。

まず、基幹産業である農林水産業は、気候変動に対応しながら一歩前へ進み、デジタル技術を活用し効率化を図ります。また、再生可能エネルギーにおいては、地産地消とクリーンで災害時にも強いエネルギーシステムの確立を目指します。そして、昔からこの土地で自然と共生してきたアイヌ民族の文化から、今の時代に通ずる考え方や知恵を学びます。このように、白糠の特性を活かしたフィールドで、環境に配慮した新たな試みにチャレンジします。

持続可能な社会づくりに貢献できる人材を育てる「環境教育」にも力を入れていかなければなりません。白糠の豊かな自然が育む産業と文化。このフィールド

での課外活動も取り入れ、幼少期から年齢に合わせたカリキュラムを実施します。環境問題をしっかり認識し、自ら考えて行動できる人材がこれからは必要となります。

白糠町は、2050年までにCO₂排出量を実質ゼロとする「ゼロカーボンシティ」を表明しました。脱炭素化は地球環境を守るだけではなく、新たな産業づくりによる地域経済の活性化や、雇用創出による人口増加など町の繁栄にも繋がる取り組みです。この素晴らしい白糠町を子や孫へ贈るために、いま私たちが行動を起こしましょう。この一歩が未来を変えると信じています。

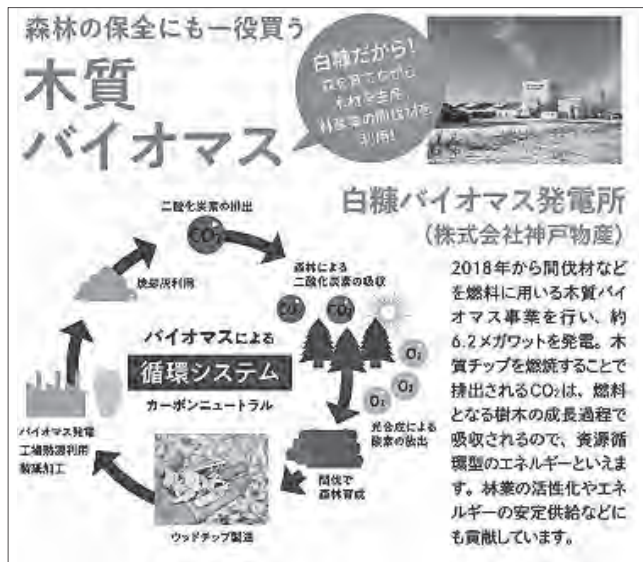
○ カーボンニュートラルが地球温暖化の特効薬

地球温暖化は他人事ではありません。このまま温暖化が進むと、気温や海水温の上昇、海の酸性化、極地の氷床が溶けて海水面が上昇するだけではなく、洪水や豪雨、干ばつなどの頻度や強さが増すといった異常気象を引き起こす気候変動により世界中に大きな影響を与えます。白糠町でも基幹産業である農林水産業や、我々の暮らしに大きな影響を与える問題です。

地球温暖化を食い止めるため、2050年までに温暖化の原因となる温室効果ガスの実質ゼロ（カーボンニュートラル）を目標に据え、世界中で様々な対策がとられています。日本では2030年度までに温室効果ガスを46%削減（2013年度比）することを目指すこと、さらに50%削減に向けて挑戦することを目指して掲げました。白糠町でもカーボンニュートラルの実現に向けて、「ゼロカーボンシティ宣言」を表明しました。

○ 目標達成には一人一人が環境を意識して行動することが必須！

白糠町では現状を把握するため、エネルギーの使用状況とCO₂の排出量を調査しました。こうした調査を自治体が独自に調査するのは先進的な試みです。結果、CO₂の削減率は2013年度比で8.7%の削減率でした。



2030年度までに削減率を50%にするためには、企業はもちろん、一人一人が環境を意識して行動を起こすことが大切です。

「白糠町地球温暖化防止実行計画」にしたがって、太陽光発電や地中熱ヒートポンプなどの再生可能エネルギーを導入し、LED照明やEVなどの省エネ対策を実施することで、CO₂排出量削減を推進します。

また、災害に強く環境負荷の低い住環境の整備や、環境に配慮した新たな産業への取り組みにより、移住・定住を促進するとともに、地域経済の活性化にも繋げていきます。

日本のエネルギー自給率は、先進国の中でも低い11.3%。CO₂排出の最大要因といわれる火力発電が7割以上を占めています。カーボンニュートラル実現に向け、再生可能エネルギーへのシフトが推奨されていますが、北海道は再生可能エネルギーのポテンシャルに満ちた土地です。道内発電電気量に占める再生可能エネルギーの割合は38%で、政府の導入目標数値（36～38%）をクリアしています。

白糠町は、日照時間の長さや冷涼な気候を活かした太陽光発電、間伐材を利用する木質バイオマス発電など、再エネ先進地です。今後は、洋上風力や地熱の検討を進め、クリーンエネルギー創出を目指します。

○ ユーラス白糠ソーラーパーク



陽光パネルを約3万枚設置し、総出力20メガワットを発電。涼やかな気候は、太陽光発電はもちろん動物を飼育するにも最適な環境です。

使われていなかった89ヘクタールもの広大な牧草地を再利用し、放牧と太陽光発電を同時に行う画期的な事業が白糠町でスタートします。両面強化ガラスの太

ソーラーグレンジング®のメリット

**農地に太陽光パネルがあってもなくても、
放牧頭数は変わりません**

- 牧草地としての牧草生産量や牛の生産量は変わりません。
- 太陽光パネルはパネルの上に設置するだけで、従来の放牧の邪魔をせず、年の放牧頭数は変わりません。
- 有機的な農地として除草剤や農薬に頼らず運営することが可能です。
- 牧草・雑草は全て羊たちが食べるのによるメンテナンスが少なく、管理がしやすくなります。
- 太陽光パネルが日差し除け、雨除け代わりになり、ストレスフリーな放牧が可能になります。

農地の土壌への影響について

放牧により有機的な農地活用が可能
ローラーグリーディング®では、草刈りに大型の重機などが必要ない

【日本で流通する羊肉の国別内訳】

放牧により有機的な農地活用が可能
リーラップ・プレーシング®では、草刈りに大型の機械などが必要ないため、土壌を荒らすことなく、自然のままの農地活用が可能となります。特に半草には牛糞などと比べても豊富な栄養分を含むため、有機的な土壌に仕上がります。

国	割合
アメリカ	0.01%
オーストラリア	63.0%
アイスランド	1.0%
ニュージーランド	35.0%
日本	0.6%
フランス	0.4%
その他外国	0.004%

羊糞などは天然肥料として活用でき、含まれる成分に窒素、リン、カリウムなどの重要な植物栄養素があります。さらに、植物の成長に不可欠な、その他の微量栄養素とミネラルが含まれています。有機物を多く含むこともあり、これは、土壌構造を改善し、水と栄養素を保持する能力を高めるのに役立ちます。

「アニマルウェルフェア(動物の生活とその死に関わる環境と関連する動物の身体的・心的状態)」にも配慮した、ストレスフリーな放牧で動物たちが健康な心身で過ごせる快適な環境が求められています。世界的な潮流とともに日本国内企業を取り組みは進んでおり、消費者のニーズも高まりつつあります。

**耕作放棄地
遊休地の
農地活用!**

両面パネルで
発電効率UP!
積雪地域でも
融雪効果を
高められます!

「**営農×太陽光発電**」

Figure 1: A line graph showing the daily variation of solar radiation intensity (W/m²) on a horizontal surface. The y-axis is labeled 'W/m²' and ranges from 0 to 20,000. The x-axis represents time from 0 to 24 hours. The curve shows a peak of approximately 19,000 W/m² around 12:00. A horizontal line at 10,000 W/m² is labeled 'ピークの1/2を越える境界線' (Boundary line exceeding 1/2 of the peak). The area under the curve above this line is shaded and labeled 'ピークの1/2を越える境界線'.

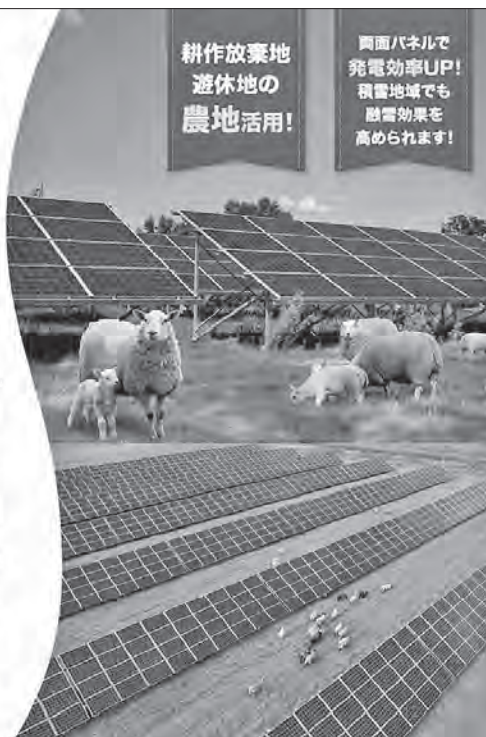


Wi

①**除草作業がないため管理コスト削減**
 時々は草が行くため、トラクターなどの大型機械や人のメンテナンスが必要なため、管理コスト削減につながります。

②**パネルパネルで発電効率UP！** 緑葉の発電効率UP！
 パネルが表面で地面の反射光を吸収し発電効率UP！また、発電時の熱で、周囲の温度を上げることで発電量UP！

③**草や虫がパネル故障のリスクがありません**
 虫や雑草がパネルの上を歩いたり、肥料のケツルを撒くことで故障のリスクがあります。草や虫の害の少ないパネルにもなります。ケツルも不要なので故障のリスクがありません。



ガストロミックスーツリズム in 北海道

～食と文化の観点から地域を見つめ、北海道を学ぶ旅～

第1話

「札幌」

遊佐 順和 (ゆさ よりかず)

公立大学法人旭川市立大学 新学部設置準備室 教授

東京都出身。北海道大学大学院教育学専攻修了。大学卒業後、日本フィルコン株式会社、池協会計事務所、AIR DO北海道国際航空株式会社、株式会社ホテルオークラ札幌などの勤務を経て、2010年より札幌国際大学に奉職し、2025年より現職に就く。本務の傍ら、内閣府地域活性化伝道師、北海道住宅供給公社理事、一般財団法人北海道開発協会評議員、一般社団法人和食文化国民会議 全国「和食」連絡会議「和食」地域特派員なども兼務する。



今月より12回にわたり、北海道内の市町村で「食」をテーマとして地域を見つめ、そのまちの歴史や文化を紐解き、特徴あるまちのご紹介をさせていただきます。初回は道都札幌のまち歩きで見つけるまちの魅力です。

昨年、知り合いのコンサルタント会社社長より、「札幌カルチャーウォーク」という企画で食をテーマに文化的に楽しく学びながらまち歩きができるコースを考えて欲しいと依頼を受けました。札幌の「食」にはいろいろなコンテンツがありますが、今回は老舗料亭と喫茶店に注目し、由緒ある場所や路地裏を探訪してまちの記憶を辿ることによって札幌の歴史や文化を紐解き、もう一度ゆっくりと訪ねたいと感じてもらえるようなまち歩きを提案しようと考えました。

老舗料亭を選んだ理由は、日本の伝統文化を継承する外観・内装など建築意匠や技などにも触れながら、北海道の海山が育む豊かな恵みが食卓に上り、会食を通じて食材のテロワール（土地の個性）に想いを馳せ、生産者に感謝の心を抱いて欲しいとの想いからでした。もう一つは、私たちが大切に守り、後世に継承すべき「和食」にも興味や関心を持って欲しいためです。

喫茶店を選んだ理由は、総務省家計調査（県庁所在地・政令指定都市を対象に実施）によれば、札幌市は天津市、京都市などに次いでコーヒーの年間支出金額が全国4位の都市であり、この背景には、北海道は冬が長く、自宅で過ごす時間も長い北国らしい土地柄を表わす嗜好品だと感じたことによります。

札幌の料亭文化を辿る

かつて札幌にはススキノを中心に料亭や割烹^{かっぽう}が軒を連ね、最盛期の昭和20年代後半には約50軒の店がありましたが、バーやクラブなどの登場により料亭はまたたくまに衰退してしまいました。ススキノ交差点近くにある南3条と南4条の間の仲通り「都通」には、かつて「いく代」「辰巳」など、札幌の代表的な名門料亭や見番（芸者衆の事務所）などが軒を連ねていました。この通りは昼夜を問わず三味線の音色が響き、とても華やかで賑わいある場所でした。現在のウインズ札幌A館あたり（南3条西4丁目）にあった割烹「いく代」は、昭和初期には札幌随一の売上を誇り、この通りは「一等小路」とも呼ばれていたそうです。現在、都通は往時をしのぶ面影を残し通りの両側にビルが建ち並び、克美ビルには札幌の代表的な老舗バー「Bar やまざき」をはじめ、各ビルに多くの飲食店があります。

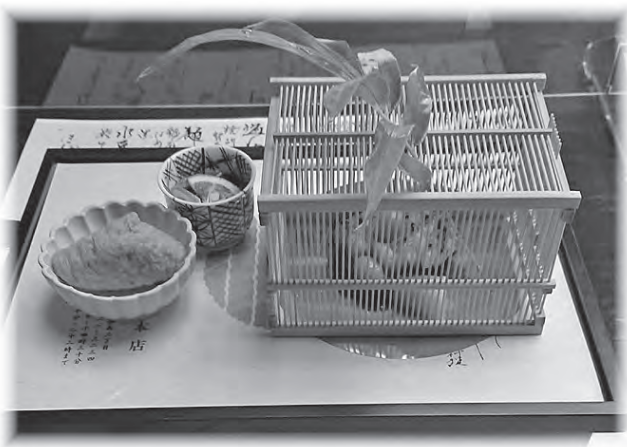
ススキノ交差点を南7条まで下ると、花街の象徴ともいわれた1945年創業の料亭「川甚本店」があります。昔ながらの佇まいを残す純和風建築の外観で、内装は



和風建築の代表ともいわれ、京都で生まれ古くから茶室や歴史的建造物などに使われてきた伝統的な土壁の聚楽壁で仕上げられ、こだわりある天然秋田杉をふんだんに用いた設えとなっています。外壁は高さ4メートルほどある木堀で囲まれた厳かで風格ある佇まいでスキノの風情を残しています。川甚本店では、こうした店舗の外観や店内の設えとともに、北海道産をはじめ旬の食材を板前料理で提供する料亭文化が今なお維持されています。

2013年12月、ユネスコ無形文化遺産の登録を受けた「和食：自然を尊重する日本人の心を表現した伝統的な社会習慣（食文化）」は、新鮮な魚介や野菜を用いて材料の持ち味を生かし調理されます。料理に加え、器の種類、盛り付けにも趣向を凝らし、季節感を重んじて調理される料理には、以下の特徴があります。

- ① 多様で新鮮な食材とその持ち味の尊重。
- ② 健康的な食生活を支える栄養バランス。
- ③ 自然の美しさや季節の移ろいを表現。
- ④ 正月などの年中行事との密接な関わり。



北海道は、この和食文化を支える代表的な出汁素材である「昆布」の9割以上を生産しています。料亭での食事は、店内の設えや前庭の四季折々の借景を堪能しながら食器を愛で、料亭ならではの情緒を感じ、地元産の出汁素材「昆布」により食材の持ち味を尊重し、季節感を生かした「和食」を体感することができ、心安らぐ優美なひとときが紡がれます。

このほか、川甚本店では北海道産の食材を生かした料亭ならではの食事とともに、芸妓による着物での立ち居振る舞いや踊り、三味線演奏、獅子舞の鑑賞など、札幌で継承されているお座敷の伝統文化（日本文化）を体感することもできます。川甚本店正面の南7条通から駅前通の南8条西3丁目に斜めに抜ける水路の形を残す「千両小路」には、かつて小路の両側に料亭や割烹が軒を連ね三味線の音色が響き、小路の折れ曲がるところに「千両」という名前の料亭があったことから小路の名前が付けられたそうです。札幌市内でこの十手のような形状をした路はここにしかありません。

これまで学生を連れ、優美な日本の伝統文化を学びながら、食卓から北海道が育む豊かな食材により地産地消を体感する会食を数回催しました。学生たちは、初めて足を踏み入れる厳かな雰囲気料亭に、最初は非常に緊張していましたが、店舗の外観、店内の設え、前庭の借景を見つめながら、日本の伝統文化に感動していました。その後から一品ずつ運ばれる料理や時季にちなんだ器を愛で、北海道の食材を中心にその素材の持ち味を生かした料理を堪能して舌鼓を打ちます。最後にお店より講話をいただき、料理はもとより料理人の食材や生産者に対する想いと、料亭文化の意義と



ススキノの歴史を紐解く話を通じ、「食」の有難さや食卓を囲むことの楽しさと地産地消の大切さを改めて感じていました。自分たちが暮らす身近なまち札幌には貴重な歴史と文化があり、そのことを一つ一つ理解して、守り継承していきたいと想いを新たにしていました。

冒頭で記した「札幌カルチャーウォーク」では、料亭で懐石料理をいただく会食にススキノの歴史を辿るまち歩きを加えたツアーとして催行しました。参加された社会人の方からは、「かつて、自分の親がきらびやかなススキノで高度経済成長期を支えた痕跡を垣間見られた」などの声が寄せられました。

料亭を巡るまち歩きは、国内旅行者はもとより日本の伝統文化や北海道に関心を持つインバウンドの皆さんにも、札幌のまち並み散策とあわせ、北海道が育む豊かな「食」とともに、素材の持ち味を生かす「和食」の奥深さや、前庭の借景、室内の設えなどを通じて料亭ならではの情緒を感じ、日本の伝統文化を体感していただくことができます。

札幌の珈琲文化を訪ねる

札幌の歴史や時代の変遷を体感することのできる場所として、喫茶店にも注目したいところです。喫茶店は独りで訪れ自分だけの時間をゆっくり過ごす、かしこまらず毎日のように気軽に訪れることもできる心地良さ、仲間と楽しく集まりコミュニケーションを取り関係性を深めて広げることもできるなど、さまざまな利用方法と楽しみ方ができる空間です。

札幌では、1970年代初期から自家焙煎された珈琲を店頭で販売するビジネスが本格的に始まりました。1972年に札幌市が政令指定都市となり人口増加が進むなか、中心部をはじめ市内各区に美味しい珈琲の提供や、自家焙煎した豆を販売する特徴ある喫茶店が誕生していきました。時折、新聞などで老舗喫茶店の閉店が報じられて残念に想うこともありますが、札幌にはまだ昔ながらの面影を残し、永年にわたり多くのお客様にこよなく愛される銘店があります。自家焙煎した豆で淹れた珈琲や、その店の定番でこだわりある料理やスイーツを提供するレトロな喫茶店や、ジャズ喫茶の銘店



などを訪ねると、開店当時から今日に至る歴史を見つめることで、まちが持つ固有の匂いやまちの記憶を辿ることもできる喫茶店があります。近年、若い世代を中心に昭和レトロな喫茶店「純喫茶」が注目を集め、静かでお洒落な空間の店舗に友人とともに訪れ、こだわりの珈琲と料理やスイーツなどを味わい、楽しく寛げる時間を過ごすこともブームとなっています。

2000年代初期、札幌でカフェがブームとなり「札幌 café本」なる喫茶店が特集された雑誌が販売されはじめると、古民家を再生したお洒落で居心地の良い店、札幌軟石で造られた倉庫を活用した店や、国の登録有形文化財など歴史的建造物を動態保存すべく店舗利用する喫茶店など、店舗の建物自体に特徴ある喫茶店もたくさん登場してきました。



こうした喫茶店探訪を通じ、まちの成り立ちや当時の暮らしの様子を知ることができ、その店舗のもともとの利用方法などを紐解くと、札幌の産業史にも触れることができ、まち歩きをより文化的に楽しいものとすることができます。

さらに近年は、チェーン店でありながら店舗ごとに異

なる趣の設えで多店舗展開する喫茶店や、珈琲豆の原産国や品種、農園まで生産地を絞り込み、栽培から品質管理まで徹底した選りすぐった珈琲豆を使う「スペシャルティコーヒー」の専門的な喫茶店も登場してきました。さらに、市内でのチェーン展開とともに地元百貨店とのタイアップにより催事フロアを会場として、全国および台湾からも有名店がこぞって集結する珈琲好きには堪らないイベント企画を毎年仕掛ける喫茶店もあります。このように、札幌の珈琲を楽しむ嗜好文化レベルは年々高まり、今後もさらに進化を続ける大きな期待と魅力を感じます。



今や喫茶店は友人との歓談やビジネスでの打合せ、イベント会場としての利用や、近隣店舗や地域団体で実施される芸術文化活動の情報発信など、新たなコミュニティの形成とまちの文化価値を創造し、より豊かな生活を醸成する役割も担っています。こうした特徴ある喫茶店を巡る際、まちなかの公園や歴史的建造物なども動線に含めると、さらに味わい深いまち歩きにできます。喫茶店で好みの珈琲や料理やデザートをいただき寛いだ後、公園で自然景観の鑑賞や野鳥、小動物との出合いが心和ませ、歴史的な趣ある建造物を見学・鑑賞し、まちの成り立ちにも想いを馳せると、札幌の歴史や文化を感じながら探訪を楽しむまち歩きとなります。札幌の気になる喫茶店と公園や歴史的建造物を組み合わせ、カフェ巡りをしてみませんか！

北海道におけるタンチョウの現状 ～生態と保護の歴史～



吉野 智生 (よしの ともお)

釧路市生涯学習部動物園管理係 学芸専門員

1979年生まれ、千葉県出身。大学時代から野鳥含む自然観察にのめり込み、獣医学部で合法的に野鳥を研究対象とするため寄生虫学を専攻。2009年酪農学園大学獣医学博士。2011年から環境省九州地方環境事務所勤務を経て、2013年より釧路市に奉職。2022年より現職。タンチョウの飼育、研究、標本作製および教育普及を主な業務とし、現在は主に阿寒国際ツルセンター勤務。

はじめに

ツル、と一口に言うと、特に道民がまず思い浮かべるのがタンチョウであろうと思います。頭が赤く、白と黒のコントラストが美しい鳥です（写真1）。ツルの仲間は世界で15種類いますが、日本で継続して繁殖し、一年中生息しているのはタンチョウだけです。また厳しい冬の間、保護のために給餌を行っていますので、給餌場に集まってくるタンチョウは、道東での観光資源としても知られています。筆者の勤務する阿寒国際ツルセンターには、隣接して給餌場があるので、冬には多くのタンチョウが飛来します。

一方で夏の間はこの光景は見られず、近くで縄張りを構えているペアか、流れ者の若い個体が時々訪れるくらいです。そのため給餌期間以外は飼育個体や館内の展示、映像資料をご覧くださいことになります。



写真1 冬の給餌場にて

タンチョウは大型で、意外と人間の近くでも生活しているのですが、その一方で地元民にとっては当たり前の存在になってしまっているのか、名前や姿以外は案外知られていないことも多くあります。様々な保護活動の結果、生息数も増えてきましたが、それに伴って課題も多くあります。今回はそんなタンチョウについて、紹介していきましょう。

タンチョウとは

まずは少し堅苦しい話から入ります。タンチョウは分類学的にはツル目ツル科に属し、主に湿地に住む大型の水鳥です。漢字では丹頂と書き、「丹」は「赤」、「頂」は「頭頂」を指します。アイヌ語ではサロルン・カムイ「湿地の神」と呼ばれます。英名は、現在では「Red-crowned Crane」すなわち「赤い頭冠のツル」が主流ですが過去には「Japanese Crane（日本のツル）」や「Manchurian Crane（満州のツル）」などとも呼ばれました。学名では「*Grus japonensis*」、「*Grus*」はツル属、「*japonensis*」は日本のという意味なので、日本のツルとして世界にも知られているわけです。もっとも、タンチョウは日本だけではなく、ロシア南部、朝鮮半島や中国南部などユーラシア大陸にも分布しています¹⁾。

タンチョウといえば頭の赤色が特徴的ですが、これは頭頂部の皮膚が裸出していて、あえてかかる言い方



写真2 成鳥（やや興奮している）



写真3 幼鳥（生後6か月程度）



写真4 亜成鳥（1歳半程度）

をすれば禿^はげています。これをいわゆるつるっばげと言うとか言わないとか。それはさておき、赤く見えるのは鶏のトサカのように、皮下の血液の色が透けて見えるためで、興奮すると血管が拡張し、血流が増えるので赤い部分が後頭部まで拡大します（写真2）。ではいつからこうなるのかというと、幼鳥のうちは頭頂部にもきちんと茶色の羽が生えています（写真3）。これが1歳を超えた頃からだんだん抜け落ち（写真4）、タンチョウは3歳で成鳥、つまり性成熟し繁殖できるようになりますが、3歳までに完全に禿げます。タンチョウにとっては大人の証なのです。

ともあれその名前のとおり、主に湿地に住み、頭が赤い。名は体を表すといいますが、当たっているのではないのでしょうか。もっとも、最近は湿地の鳥というばかりでもないのですが、それは後ほど。

タンチョウの保護の始まり

タンチョウは過去には本州にも分布していましたが、狩猟による個体数減少や、開発に伴う生息地の減少などにより、明治時代に一度絶滅したと考えられていました¹⁾。そんなタンチョウが数十羽、釧路湿原の奥地で再発見されたのが1924年で、現在はそこから約100年が経過しました（表1）。再発見以降、地元住民や行政などにより様々な保護活動が行われるとともに、国の特別天然記念物に指定され、また種の保存法に基づく国内希少野生動植物種にも指定されました。

IUCN（国際自然保護連合）のレッドリストではVU（危急種）、日本の環境省レッドリストでは絶滅危惧Ⅱ類（VU）とされています。

野生動物の絶滅を防ぐためには、大きく分けて、本来の生息地での個体の増殖や生息環境の改善を図る「生息域内保全」と飼育下繁殖個体の増殖、再導入によって野生個体群を補強する「生息域外保全」の2つの考え方があります。動物園など飼育施設では主に後者が行われており、釧路市は国の保護増殖事業計画²⁾に基づき、環境省から保護増殖事業者の確認を受けてタンチョウの飼育、繁殖や保護に取り組んでいます。

表1 主に釧路市に関するタンチョウ保護の動き

1889 明治22	北海道庁丹頂狩猟禁止令
1892 明治25	保護鳥指定
1924 大正13	釧路湿原内で再発見
1935 昭和10	天然記念物「釧路のタンチョウとその生息地」指定
1950 昭和25	阿寒町で人工給餌成功
1952 昭和27	道の一斉調査で33羽が確認。特別天然記念物指定
1958 昭和33	釧路市丹頂鶴自然公園開設
1965 昭和40	阿寒町タンチョウ愛護会結成
1967 昭和42	特別天然記念物指定（地域を定めず）
1968 昭和43	鶴公園で人工繁殖に成功
1975 昭和50	釧路市動物園開園
1977 昭和52	阿寒町タンチョウ観察センター開館
1981 昭和56	阿寒町のタンチョウ飛来地域が鳥獣保護区指定
1982 昭和57	タンチョウ保護増殖センター開設
1993 平成5	絶滅の恐れのある希少野生動植物の種の保存に関する法律制定 国内希少野生動植物種指定（保護増殖事業計画の策定）
1996 平成8	阿寒国際ツルセンター開館
2011 平成23	ニトリ・サルルンカムイプロジェクト始動（2015年度まで）
2013 平成25	環境省タンチョウ生息地分散行動計画策定
2015 平成27	給餌場における給餌量調整開始
2023 令和5	環境省タンチョウ生息地分散行動計画改定
2024 令和6	環境省給餌場における高病原性鳥インフルエンザ対応指針策定

タンチョウの飼育の歴史

1958年に釧路市丹頂鶴自然公園（鶴公園）が開設され、人の関与の下でタンチョウを自然繁殖し、育った個体を野外に放鳥すること、および飼育繁殖に関する知見を集めることを目的としてタンチョウの飼育が始まりました。ここに野生から捕獲された5羽が放され、やがて野生から飛来した個体とペアが成立し、繁殖が始まったのです。1964年には初めて人工育雛に、また1968年に初めて人工繁殖に成功しました。そうして育てられたヒナの多くは野外に放鳥されました³⁾。1975年には釧路市動物園が開園、その後1982年に動物園内にタンチョウ保護増殖センターが開設され、タンチョウの飼育数も増えていきました。現在では、1996年に設立されたツルセンターも含めた3施設でタンチョウを飼育しています⁴⁾。

身体検査をしてみる

さて、飼育をしていますので、ちょっとタンチョウの体を詳しく見てみましょう。身長約140～150cm、体重は約6～10kg、翼を広げると240cm程度になります。なお科学的には【全長：嘴の先から尾羽の先まで】を示すべきなのですが、今回はわかりやすさ重視で立ち姿とします。なお全長の場合は約120～140cmです。筆者が165cm程度ですので、成人男性より少し小さいと思えばよいかと。なお体重は比べてはいけません。鳥類の中ではかなり大型の部類で、そのため、飛び立つ際に数歩の助走が必要になります。体重は季節に伴って1～2kgの増減があり、秋から冬にかけて食い込み、春先から夏にかけて体重が減少します^{1)、5)}。人間はこんな簡単に体重が変化しませんのでうらやましい限りです。いや、簡単ではないのでしょうかけれど。

タンチョウは主に湿地などに生息します。背が高く、脚が長く、足の指も長いです。時々、「膝が逆に曲がっている」と聞かれることがありますが、タンチョウを含め、鳥類の膝は外からははっきりと見えません（写真5）。逆に曲がっているように見えている関節は実

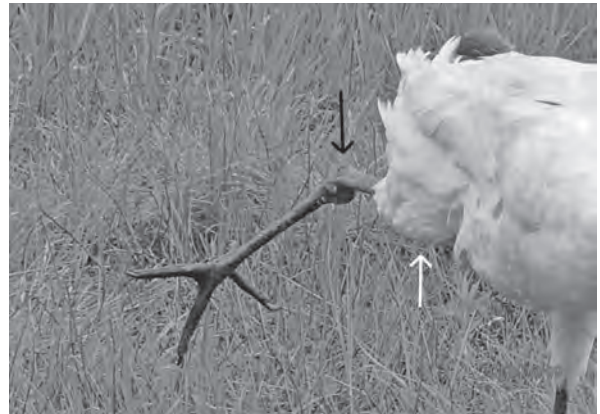


写真5 黒矢印が踵、白矢印が膝

は人間でいう踵^{かかと}で、鳥類では「ふ蹠^{しよ}」と呼び、タンチョウでは約30cmありますが、これは哺乳類でいう足首の骨と足の甲の骨が癒合した部分です。タンチョウに限らず、鳥類は基本的につま先立ちをしています。足の指も長く、足跡は直径約18cmになりますが、第1趾（人間でいう親指）が少し高い位置についているため、物が握れず、木の枝に止まることはできません。代わりに、長い脚と長い趾^{あしゆび}で体を支え、湿地など足元の悪いところでも自在に歩き回ることができます。

体の色や形には、雌雄で違いはありません。性別は飼育管理上重要なので、現在は血液などを採取し、DNA判別を依頼していますが、お金や時間、捕獲の必要性など課題もあります。オスの方が全体的に少し大きいため、計測値から雌雄はある程度判別できます^{6)、7)、8)}。ただぱっと見ではわかりませんし、数値にばらつきもあります。なので、残念ながら単独でいた場合は雌雄を見分けるのはまず不可能です。ペアが成立していれば、鳴き合いという特徴的な行動（オスが一声「コー」、メスが二声「カッカッ」と続けて鳴くことで、ペアで行われる鳴き方）があり、またその際オスは翼を少し持ち上げるので、声や行動から判別できます¹⁾（写真1はペア同士の張り合いで、右から2番目はオス）。

タンチョウの声は非常に大きく、広い縄張りによく響きます。タンチョウに限らず鳥類は大きな胸骨（い

わゆるヤゲン）を持ち、竜骨突起という部位に大きな胸筋、浅胸筋（いわゆる胸肉）と深胸筋（いわゆるささみ）が付きます。タンチョウの成鳥では合わせると約1 kg以上あります。タンチョウの気管は非常に長く、この竜骨突起の中に潜り込み、中でループしています（写真6）。鳴管から発せられた声は、この長い気管で金管楽器のように増幅され、大きな声となるのです。気管は成鳥では約110～130cmと長く、個体差はありますが、オスの方がメスより長いです⁹⁾。気管は成長に従って胸骨内に入り込んでいき、それに伴って声変わりをします。ヒナのうちはピイピイという甲高い声しか出なかったのが、1歳頃には少し落ち着いて、少しずつ親のような声に変わっていくのです¹⁰⁾。



写真6 胸骨内の気管走行

タンチョウの飼育と繁殖

さて、先述のとおり、タンチョウは3歳で成鳥となり、繁殖可能になります。雪が解けてきた3月中頃から繁殖期に入り、縄張りの中に枯草や枯れ枝などを集めて、直径約100～120cmの皿状の巣を作ります（写真7）。卵は一度に1～2卵で、有精卵なら約32日でヒ



写真7 タンチョウの巣



写真8 卵（左が1卵目）



写真9 暗箱内で光を当てる

ナがふ化します¹⁾（写真8）。1卵目と2卵目の大きさには差があり、おそらくヒナが1羽でも育つことを優先しているのでしょう。2羽を育て上げるペアもいますが、冬に2羽連れで確認できる割合はヒナ連れのうち約15%で、2羽育て上げるのは大変な労力がかかると考えられます¹¹⁾。

卵は雌雄交代で抱くので、ペアで行動していたタンチョウが片方ずつ行動するようになったら産卵したことがわかります。確認後数日してから卵を一度回収して巣には擬卵を入れ、本物は大きさを測り、暗いところで光を当てて有精卵かどうかを調べ（写真9）、ふ卵器で保温して有精卵だった場合はふ化予定日の数日前に親元に戻します。過去には人工育雛、飼育を行っていましたが、現在は親に育ててもらう自然育雛を基本としています^{3)、4)}。

ヒナはだいたい体重100g程度、手のひらに乗るサイズで生まれてきますが（写真10）、すぐに大きくなり、生後約3か月で親くらいの身長になります。4か月程度で羽が生えそろい飛べるようになるので、その頃一度捕獲し、計測や採血、性別判定を行います。また飼育下に残す場合は風切羽^{かざきりばね}の一部を切る切羽を行い、ケージから飛び出せないようにします。過去には羽を切らず出入り自由に飼育していましたが、現在は事故の防止や鳥インフルエンザ防止などのため切羽しています。タンチョウの風切羽はだいたい2年に1回抜け落ち、1か月半程度かけて新しくなります^{12)、13)}。そのため、飼育個体は健康診断を兼ねて定期的に捕獲しています（写真11）。



写真10 ヒナ（生後約1週間）



写真11 体重測定

成長、そして個体群管理

タンチョウの飼育は最初に鶴公園に放された5羽と、鶴公園に飛び込みそれらとつがいになった野生個体から始まりました。ここに傷病保護されて野生に戻らなかった個体や、新たに飛び込んできた個体などが加わり、現在大きく3つの家系があります。生まれた個体は、当初は設立目的に従って主に放鳥されましたが、現在は飼育個体の世代交代や新たな血統を加えていくため、血統を確認しながら方針を決めています⁴⁾、¹⁴⁾。放鳥する場合は環境省指定の足環^わをつけ、残す個体は切羽して管理します。ヒナが大きくなり、2月頃には子別れが始まります。残す個体は捕獲して別のケージに分け、放鳥個体は、親が次の繁殖を始めるのでいずれ追い出されます。足環がついているので、目

撃情報があればどこに行ったか、何年生きたか、繁殖したかなどがわかってきます。1999年以降で33羽を放鳥していますが、そのうち約4割がペアを形成し、8ペアがヒナを育てたことがわかっています¹⁵⁾。このように、飼育個体の放鳥も野生個体群の維持に一部寄与しています。

一方でタンチョウは縄張りを強く意識するため、ある程度広い飼育スペースが必要で、ペアまたは単独でしか飼育できません。そのためブリーディングローン（繁殖貸与）という仕組みを利用し、複数の動物園で飼育を行っています。現在は釧路以外に旭山動物園、円山動物園、そして岡山後楽園で北海道産のタンチョウが暮らしています。また2011年に当園と台北市立動物園との間で学术交流の覚書が交わされ、また同年から2015年まで行われた株式会社ニトリホールディングスと釧路市、北海道の連携協定による「ニトリ・サルルンカムイ・プロジェクト」の一環として、台北市立動物園にもタンチョウ1ペアが貸与され¹⁶⁾、2022年にはヒナが誕生しています。タンチョウの域外保全是、このように多くの主体が関わって行われています。

さて、飼育の話で紙面が尽きましたので、次回は野外での状況を交えて紹介いたします。

参考文献

- 1) 正富宏之 2000 タンチョウ-そのすべて- 北海道新聞社
- 2) 環境庁・農林水産省・建設省 1993 タンチョウ保護増殖事業計画
- 3) 叢書編さん事務局 1976 タンチョウの釧路. 釧路市
- 4) 釧路市動物園 2015 開園40周年記念誌「あゆみ」 釧路市
- 5) 矢口 茜 2016 動物園研報1: 188-191.
- 6) Inoue M. et al. 2013. J. Vet. Med. Sci. 75: 1055-1060.
- 7) 村田浩一ほか 1988. 山階鳥研報20: 101-106
- 8) 吉野智生 2024 阿寒国際ソルセンター紀19: 3-6
- 9) 吉野智生 2025 阿寒国際ソルセンター紀20: 3-7
- 10) Klenova AV et al. 2007. Ornithol. Sci. 6: 107-119.
- 11) 正富宏之ほか 2017 阿寒国際ソルセンター紀14: 3-26
- 12) 吉野智生ほか 2018 阿寒国際ソルセンター紀15: 21-26
- 13) 正富欣之・正富宏之 2022 山階鳥学誌54: 274-279
- 14) 井上雅子 1999 動水誌40: 90-96
- 15) 松本文雄ほか 2014 ふれあい129: 4-5
- 16) ニトリ・サルルンカムイ・プロジェクト連携協定事業支援委員会 2020 ニトリ・サルルンカムイ・プロジェクトの歩み. 北海道環境局自然環境課



自然環境とのつながり、
人とのつながりのあるべき姿を追求し
地域でゆっくりじっくり生きていく

大橋 三千雄 (おおはし みちお) さん 建築家、養鶏家、パーマカルチャーデザイナー

1963年千葉市生まれ。15歳から北海道で育つ。東京で2社、フランスで1社、札幌に戻り1社の建築設計事務所に勤務。個人住宅、公共建築、商業建築の設計に関わっていた。1997年に独立し設計事務所を設立。2016年に友人のいる豊浦町を訪ね、その3か月後には移住。現在はパーマカルチャーの実践者として地域循環型の養鶏を実践している。

北海道に移住（U・I・Jターン）して、地域を巻き込む取り組みをする輝く人を紹介するインタビュー。お話を伺うのは、北海道各地を探訪し想いを形にする人との出会いをつなぐ、地域プロデューサーのかとうけいこさん。35回目となる今回は、豊浦町にIターンし、地域おこし協力隊を経て“農的暮らし”を実践して10年目になる、「大橋ビオピオ農園」代表の大橋三千雄さんにお話を聞きました。

パーマカルチャーとの出会いを教えてください

まず、聞きなれない方もまだまだ多いパーマカルチャーを一言で説明するとしたら、「石油などの化石燃料に依存する暮らしを改め、太陽の恵みを十分に活用して地球環境や人に配慮した循環型の社会を築く」というものです。そして、今自分は豊浦町で、地域の人たちとのつながりを大切にし、生活に必要なものが少しでも地域で循環するような生活の実践をしています。

もともと建築設計が生業で、35歳で独立した時に「地球環境と人間の健康を守る建物を作りたい」という目標を掲げました。ただ、環境と人の健康に気を使うと、イニシャルコスト（初期費用）がアップしてしまうという現実があります。その必要性を理解してもらえるように、2001年から地球環境と健康を学ぶ勉強会を企画し、自らも学びました。そんななかでパーマカルチャーに出会いました。当時を振り返ると、「暮らし全体をどう持続可能にできるか」を考えるなかで自分の専門である建築のほかに、自然とのつながりを目指すパーマカルチャーの考え方は自分のなかでとてもしっくりきました。2013年に世界共通のパーマカルチャーデザイナーという資格を取り、パーマカルチャー北海道を仲間と立ち上げました。ベランダや市民農園で野菜を育て、コンポスト*を使って循環を考えするという小さな一歩を踏み出しました。

豊浦町との出会いは？

パーマカルチャーと一緒に学んだ東京の友人が、豊浦町に移住したと連絡があり、遊びに行ったのが、豊浦町に足を踏み入れた最初です。真冬の2月でしたが、大好きな海や山が近いこともあり、いい所だと感じました。そして3月には役場を訪ねて、移住の可能性を探しました。

ちょうどその時、豊浦町では最初の地域おこし協力隊を募集していました。担当者が柔軟で親切だったということも私の背中を押してくれたように思います。私が田舎に移住したいことと、町が定住者を求めていることが一致。最初の協力隊で良くも悪くも自由さがあったことなどが決め手だったと思います。

地域おこし協力隊員としての3年間は？

1年目は、なんでも屋さんでした。所属は農政課でしたが、ホタテ漁師の手伝い、クマの檻おりを設置と幅広い活動で、多くの町民に出会う機会がありました。ありがたい時間でした。

近隣の市町村との交流も必要と感じ、西胆振いぶりの協力隊ネットワークを立ち上げ、洞爺湖町とうやこ、壮瞥町そうべつ、伊達だて

* コンポスト (compost)

生ごみや落ち葉、下水汚泥などに含まれる有機物を微生物の作用を利用して発酵・分解させて堆肥を作る容器。

市、白老町しらおいなどの協力隊員と定期的に情報交換しました。各地での取り組みや、抱える問題点がわかり、それにより自分の立ち位置が明確になりました。

2年目には、パーマカルチャー連続講座というタイトルで、農的暮らし見学会や実践講座を毎月開催しました。その1回目は、パーマカルチャー入門という題名で私が講師となりパーマカルチャーを解説しました。30人集まれば良いなと思っていたら、いろいろな協力もあり70人も集まりその後の活動に勢いがつきました。

3年目は、起業に向けての事業計画書を提出し、養鶏業を行うために協力隊終了時から卵の売り上げがあるよう1年間かけて準備させてもらいました。鶏は卵を産むまで約5か月かかるので、10月に最初のヒナが来るように、スケジュールをたててから、場所探し、鶏舎建設、研修に励みました。

平飼いで初生ヒナから育て、湧水を飲み、玄米を主食にすべて道産の自家配合のエサを与えて健康な鶏の卵を提供できるようにと考えました。

今後についてお聞かせください

養鶏については、スタートして数年間で安定しました。「BioPioクラブ」という会員制販売で会員さんには、これまで通り毎週配達して、玄関先でお話を聞くスタイルを続けていきます。

ホテル、レストラン、道の駅といった企業顧客と、遠方に暮らす方への郵送も維持していきたいです。ふるさと納税の返礼品としても認知されてきたので、これも情報発信を丁寧続けていきます。

今年、近隣の方から住宅を譲りうけ、最低限の修復をして引っ越しました。これから時間をかけてパーマカルチャーの学びの場所にしたいです。

ゲストルームをつくり宿泊可能とし、養鶏や建築、畑作りから料理までを一緒に学べる場にしていきたいと考えています。 (2025年7月取材)

インタビュー後記

フランスで設計を学び仕事をし、豊浦町で地域おこし協力隊員第一号になり定住した大橋さんは、評論家ではなく実践家。ほとんど知り合いがいない町に飛び込み、じっくり人脈を広げ活動内容も厚みがある姿は素晴らしいもので、お話を聞きながらワクワクしました。

かとう けいこ (株)まちづくり観光デザインセンター代表

根室市 移住コーディネーターの挑戦 リアルを発信し、 新しい人の活気を!



飯田 雄貴 (いいだ ゆうき)

1997年5月生まれ、根室市出身。大学卒業後、採用コンサルタントとして活動し、企業の中途採用支援業務に4年間従事。2024年5月より根室市地域おこし協力隊の移住促進コーディネーターとして着任。

【協力隊への応募経緯】

前職では、東海圏内の地方部にある中小企業に対し、採用課題の解決に向けたコンサルティング業務を実施していました。その業務のなかで、採用課題の根本的な原因として「町自体の人口減少」や「進学や就職に伴う若手人材の流失」といったものに直面することも多く、一企業の努力では解消し得ないような問題にぶつかる機会が非常に多くありました。また、毎年根室市へ帰省するたびに、根室市でも同様の事象が顕著に発生していることを感じており、「いつかは地元がなくなってしまうのではないか」とすら考えるようになりました。

そんななか、人材業での仕事をしていくなかで「地方創生事業に携わりたい」「北海道で暮らしたい」「自

分で事業を起こしてみたい」という想いが日に日に強くなり、2023年秋から冬ごろに転職や企業を考え、さまざまな情報収集を始めました。そのなかで『根室市地域おこし協力隊』の制度を知り、「この制度であれば自分の経験を活かしながら、やりたいことを叶えるチャンスがあるかもしれない」と思い、すぐにエントリーをしたというのが応募の背景です。

【これまでの活動・今後の展望】

着任1年目は、『根室市内の現状を知る』という活動と『根室市内での人脈づくり』にフォーカスした活動に従事しました。根室市役所の方や地元企業との打ち合わせを通じて「地元の人々が根室市の現状と未来に対してどう考えているのか」を知るための活動を行ったり、同じ地域おこし協力隊メンバーとの交流を深め、共同イベント活動などを実施しました。根室市は春～秋ごろにかけてさまざまなお祭りやイベントが実施されるという特徴があり、そうしたイベントに『根室市地域おこし協力隊』として飲食等のブースを出店したり、地元企業とのコラボといった形で交流を図る活動を継続しました。結果として、自身の活動を応援・協力してくれるという方々とのご縁があり、任期1年目の終盤からは移住・定住促進を目的とした事業づくりに着手することとなりました。



協力隊同士で地元のお祭りに出店

着任2年目を迎えた現在は、自身の事業として『移住・定住促進に向けた情報プラットフォーム』の開発を行っています。地方移住においては、仕事や住居探しに並び、人間関係（新しいコミュニティ）づくりといった部分に大きなハードルが存在している状況です。その状況は根室市も例外ではなく、ネットなどでは根室市の仕事等に関する情報が不足しているため、根室へ直接足を運ばず情報収集を行う難易度は高い状態となっています。市外（道外）からのアクセスが良い町ではないため、「情報収集しづらい＝根室市への移住意向が醸成されない」という図式となります。そのため、まずは『ネットを通じて根室市のことを気軽に知れる』という環境が必要であると考え、「このサイトを見れば根室市の暮らし・仕事のイメージ・コミュニティが分かる」という情報プラットフォームを作ろうと決意しました。2025年度中にはリリース予定であり、根室市のさまざまな企業にも参画いただきながら、根室市の情報を今よりもオープンにすることで、移住・定住者の増加につながるような施策にしたいと思っています。

さらに、サービスが根室市の情報プラットフォームとして浸透した暁には『採用・商品販売・コミュニティのマッチングプラットフォーム機能』を拡張し、「このサイトを見たら根室市が理解でき、つながりが持てる」と言われるサービスにしたいと思っています。ゆくゆくは道東エリアや道北・道南の地方部エリアにまで普及し、『北海道の地方部情報を網羅したプラットフォーム』としての役割を担えるような媒体になりたいと考えています。



移住検討者とお話している様子

【やりがい・課題】

協力隊活動のやりがいは、『地域貢献の実感』と『故郷をもっと好きになれること』の2つです。活動を頑張っていると、多くの市民・企業の方々に応援される機会が日ごとに増えていると感じています。ほかにも、地元企業とのコラボ企画などを通じて、普段は歩行者が少ない商店街にたくさんの人が歩いている様子を生み出すなど、文字通り地域に貢献できていると感じることがとても嬉しい^{うれ}です。そうした活動のなかで、子どものころには気づけなかった、根室市で暮らす人々の温かさや、「根室を元気にしたい」という想いのものと仕事・イベントに尽力する方々の姿を目にする機会も多く、『人』を中心に根室市のがもっと好きになりました。

一方で、『新しいものを浸透させることの難しさ』という部分には大きな課題感を持っています。移住者獲得に向けて採用の切り口からアプローチした際、都市部では当たり前のように普及しているような人材紹介型サービスなどをご提案するも、仕組みや費用感に対してご理解いただけず、検討すら難しいといったケースが生まれました。ほかの協力隊員との協業活動においても同様のケースが見受けられたため、「新しいものをどのような形にし、どのように受け入れてもらうか」を模索し続ける必要があると感じています。

【根室市地域おこし協力隊について紹介】

現在、根室市地域おこし協力隊として活動している多くの方が『何らかのスペシャリスト』であり、すでに自身の事業を持たれている方が多いです。私は雇用・採用支援のスペシャリストですが、ほかには飲食物の商品開発者、サウナイベーター、プロカメラマン兼映像作家、トレーナー、作曲家、エスティシアン、イラストレーター…など、さまざまな分野で活躍する方が集まっています。根室市以外のエリアでもお仕事をされている・できるという方ばかりなので、何か興味があれば、根室市地域おこし協力隊公式 Instagram (@nemuro_shot) までぜひご連絡ください！

【課題克服に向けた近年の積極的な活動】

課題克服に向け、近年では原料を保管する冷凍機の導入を行い、製品の安定的・量的生産が可能となってきたことから、さらなる販路拡大を目指し、その販路拡大を行うための情報発信する上で、最も重要な当組合のHPについては、従来のパソコンからの閲覧前提を、スマートフォンに対応し、見やすい、使いやすくしユーザーエクスペリエンスの向上が図られ、訪問者の満足度向上につながるほか、デザイン性の向上によるブランド力の強化、検索エンジン最適化とSNS連携により、当組合の知名度向上と製品の売上増加が期待できるように、積極的に発信できる体制を整え、各組合員による販促活動に加え、道の駅等への出品、各種イベントへの出展やリニューアルした組合HPから直接販売可能なネットショップを開設するなど、道内外への販路拡大の取組を積極的に行っています。

【これからの「オホーツク加工食品ブランド」を】

これらの取組は、地域の小規模な生産者が単独で行うことの困難だった6次産業化を推進することで、地域産材の付加価値を高めた商品の開発を実現し、食の地域ブランド化に貢献している事業モデルです。今後も、それぞれの地域と組合員が持つ強み、連携を強化し、そしてオホーツクの発酵酢を活かした新商品の開発と販路開拓に積極的に取り組み、当組合地域産材のさらなる付加価値向上を目指していききたいと思います。



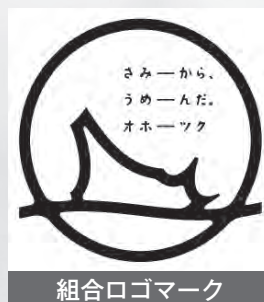
宇都宮福田屋百貨店にて販売会実施



宇都宮福田屋百貨店にて販売会実施



北海道中小企業くみあい祭り2023 出展



<https://shop.okhotskfoodconcerto.com/>

オルシクルマラプト

オルシクルマラ
プト（oーそこに
rusー毛皮 kurー
を包含する mar
aptoー頭蓋語源
は客人）とは、
毛皮付きの熊の
頭蓋を指す語で



佐賀 彩美 (さが あやみ)

アイヌ語地名研究会

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モンレー国際大学院（現ミドルベリー国際大学院モンレー校）通訳翻訳学科修士課程修了。北海道大学大学院農学院農学専攻博士後期課程修了。全国通訳案内士。

けて外へと引き出
されます。また、
この時、穴の中には
手のひらに乗る
ほど小さな子熊が
いる場合もあるそ
うです。引き出し
た熊は早速にその

す。このコラムでは過去2度ほどアイヌの代表的な霊送りの儀礼であるイヨマンテについて書かせていただいたことがあります。イヨマンテは原則として、子熊から育てた熊を送る儀礼ですが、山で授かった熊も送りの儀式がされていました。藤村先生の最後の講義では、この送りについて説明されていたのでご紹介します。

生活のすべてを自然の恵みに依存していたアイヌの人々は、自然を注意深く観察していました。例えば、1月下旬から2月初めの雨は熊の子どもを洗う、それから約1か月後に降る雨はシャチの子どもを洗う、と表現していました。春熊猟は3月に雪が堅雪へと変わり、簡単に雪面を歩けるようになると始まります。熊は大抵、陽の当たる南斜面に越冬用の穴を掘り、穴の一番奥で周囲より一段高くなっている場所に笹を敷き詰め、そこを寝床とします。アイヌの人々は、前年のうちに、熊が越冬用巣穴を掘った斜面の穴の位置を確認・記憶していました。熊は、秋に鮭やドングリをたっぷり食べて越冬に十分な栄養を蓄えます。肩の脂肪層は10センチほどの厚さにもなるそうです。そして、春先になるとどういふ訳か、熊の穴の入り口付近に土くずのために雪色に変色し、穴の場所が一層見分けやすくなります。神々の物語には熊のお手伝いさん役の狸が、穴の中を掃除して汚れた土を出すのだという話があります。

熊の穴に到着すると、猟師は、巣穴を塞ぐように数本の棒を立ててから、棒の先端に荷縄を結び、もう一方を立木に結ぶことで、完全に封閉します。熊は、体の構造上、前足は手前側にしか動かさないため、棒を外側に押し出すことができません。そこで、熊は待ち構えていた人によって仕留められ、その骸は荷縄をか

場で荷ほどき（解体）され、頭蓋つきの毛皮を背負う人を先頭に、各部位の骨や肉、そして莫塵で包んだ内臓等が順番に山から里へと降ろされますが、獲物を得たことは、猟師の指示を受けた猟犬によってすでに村に知らされています。一行の到着は、猟師たちが村近くで木を叩いたり、空砲を撃ったりして知らせました。村の入口近くでは、女性や子どもたちまで、総出で「オノノー、オノノー」と、手を叩いて歌いながら迎えることとなります。

そうして、一行は村長の家まで行くと、熊神（熊の頭蓋）を、屋外に設けられた祭壇の神様に挨拶させてから、神窓より家の中に運び入れます。この間も、先ほどの歌はずっと歌い続けられます。また、送りの儀式にはたくさんのご馳走が欠かせないため、各家が手分けして準備しました。中でも一番大切なのは米粉やイナキビやアワなどで作る団子ですが、それらはすべて精白しなければならないため、2～4人ほどの女性が一組になって臼でついて糠を取り除きます。この作業は、「ヘッサオーヘッサ」という3拍子の歌などを歌いながら、休まずに行われました。こうした送りの儀式は1日だけでなく2日、3日と続きます。

道内では今年も熊の出没が相次ぎ、駆除が強化されています。昨年、白糠では5月に捕獲した熊を冷凍庫で保管し、9月になって関係者が費用を出し合って送りの儀式をしたそうです。いつも申し上げることですが、人手も費用もかかるイヨマンテや駆除された熊の送りを、できれば公的補助により復活させることはできないものかと思います。これは、アイヌ文化伝承の根幹に関わる重要なことなのです。

＊本稿は、元北日本文化研究所代表であった藤村久和先生を講師として（一社）北海道開発技術センターが自主事業として実施してきたアイヌ文化勉強会の内容を筆者が取りまとめたものを、藤村先生に長年師事されていた花輪陽平氏に校閲いただいたものです。

藤村 久和 氏（1940-2025）元北海学園大学名誉教授 北日本文化研究所代表 アイヌ語地名研究会会長
アイヌ学全般（精神文化・口承文芸・衣食住・民族医療（整体ほか）等）を研究領域とすると共に、アイヌの人々が自然を管理することなく、いかに共存してきたかについて、その思想や哲学を自ら学び・実践してきた。主な著書：『アイヌの霊の世界』（小学館、1982年）、『アイヌ、神々と生きる人々』（福武書店、1985年）、『アイヌ学の夜明け』（梅原猛氏との共編、小学館、1990年）、『アイヌのごはん』（監修、デーリイマン社、2019年）、『平成20～令和6年度アイヌ民俗文化財調査報告書アイヌ民俗技術調査1～16』（北海道教育委員会、2008～2025年）等。

日本遺産の町の 伝統食を守る

えさし水土里の会

会 長 長尾 和子 さん(ながお かずこ)

副会長 近藤 久美子 さん(こんどう くみこ)

事務局 小笠原 明彦 さん(おがさわら あきひこ)

農山漁村における地域の活性化や、個性的で魅力ある地域づくりの優れた活動を紹介するシリーズ。

今回は「わが村は美しくー北海道」運動第8回コンクールで優秀賞を受賞した「えさし水土里の会」の長尾会長、近藤副会長、小笠原事務局にお話を伺いました。

《北海道第1号 日本遺産に認定された町》

北海道の南西部に位置し、北海道文化発祥の地といわれる江差町は「江差の五月は江戸にもないーニシンの繁栄が息づく町ー」のタイトルで、北海道第1号の日本遺産に認定されました。民謡の王様「江差追分」、北海道最古のお祭り「姥神大神宮渡御祭」など数々の有形・無形文化遺産が息づいているほか、江差沖で座礁沈没した江戸幕府の軍艦「開陽丸」が復元され、幕末のロマンを漂わせており、歴史的建造物が建ち並んだ「いにしえ街道」も整備され、多くの観光客を迎え入れています。

《伝統食を守るため》

歴史あるこの地域の伝統食を守っていききたいとの思いを持った農家の主婦たちが、平成23年に廃校となった小中学校を利用し、伝統食や郷土料理を作り、次の世代に伝えていこうと始めました。



かたこもち体験の様子



左から長尾さん、近藤さん（後は旧江差町立朝日小中学校）

“水”が豊かで“土”があり作物をつくり“里”を形成しているという自然の恵みを表し「えさし水土里の会」と名付け、現在は事務局を含め、12人で活動しています。

伝統食として作られている主なものは、代々伝わる「型」（菊・桜・桃の花の形）で作る黒糖のおもち「かたこもち」。薄く伸ばしたもちに甘く味付けし、天日干しで乾燥させた“こうれん”。といったこの地域に古くから伝わるお米のお菓子です。

地域で採れる食材を使った、味噌や大豆かりんとうなど特産品も手掛けており、中でも枝豆を漬物にした“豆漬け”はあっという間に売れてしまうほどの人気商品です。

《伝統食を次の世代に〜》

会員たちは、農繁期の忙しい時期も家族の理解と協力の下、伝統食作りに励み、地元の子どもたちに郷土料理を教え、伝統食の良さを伝える活動をしています。「ふるさとの味」でもあり「母の味」でもある郷土料理と食文化を学ぶことは、その地域のことを深く知り自然への恵みにも感謝する「やさしい気持ち」を育てる大切な食育なのです。

江差町も年々人口が減少し、伝えるべき子どもたちも減っていますが、故郷を離れ大人になったとき、「小さい頃に食べたあの味」と思い出してくれることを願い、同じ思いを持つ次の世代につなげたいと、「この指とまれ！」と呼び掛けています。

当協会ホームページ、「わが村は美しくー北海道」運動第1～9回受賞団体の活動概要をまとめた冊子『生産空間の活性化に資する地域事例集』をご覧ください。



北海道インバウンドフォーラム開催 「インバウンドの現状と新しい可能性を探る」

現在、インバウンド市場は好調です。特に2024年以降、訪日インバウンド客数はコロナ前の水準を上回り、観光業界にとって再活性化の重要な局面を迎えています。一方で、北海道においては訪問地域の偏りやオーバーツーリズム、地域の受け入れ体制の課題、旅行者ニーズの多様化など、持続可能な観光を実現するためには新たな視点と取り組みが求められています。

本フォーラムでは、インバウンド観光の現状を多角的に考察し、持続可能かつ地域の魅力を最大限に引き出す新しい観光の可能性について、地域主体の体験型観光や交流型観光を活用した観光戦略、多文化共生の視点など、これからのインバウンド観光に求められる方向性について考えることを目的として開催します。

開催
日時

2025年
9月19日(金)
14:00～16:10

開催
場所

国際ホール
札幌市中央区北4条西4丁目1番地
札幌国際ビル8階

フォーラム次第

■主催者代表あいさつ

- 国土交通省北海道運輸局観光部長 村上 浩之

■基調講演

- 観光の量から質への転換は可能か？
～選ばれる観光地から、観光客を選ぶ観光地への転換～
一般社団法人小豆島観光協会 事務局長 塩出 慎吾氏
- 外国人から見た地域のインバウンド対応について
～日常の感動を新たな価値に～
Hibi Japan 代表 アーネスト・モク氏
- 美味しい一皿がまちを変える
～地域のレストランとオーベルジュ～
(株)えんれいしゃ 北海道生活 編集長 八木 由起子氏

主 催

国土交通省 北海道運輸局
一般財団法人 北海道開発協会

後 援

国土交通省 北海道開発局
北海道
公益社団法人 北海道観光機構

申込み方法

参加
無料

フォーラムの参加申込は、
Web サイトの申込みフォームから
お申込みください



<https://inbound-jp.info/forum/>

問合せ先 北海道開発協会 開発調査総合研究所

TEL:011-709-5213 Mail:inbound-info@hkk.or.jp



国土交通省 北海道開発局
網走開発建設部



国立研究開発法人 土木研究所
寒地土木研究所



公益社団法人 日本技術士会 北海道本部
The Institution of Professional Engineers, Japan Hokkaido RHQ

第47回 技術者交流フォーラム事業 in網走

オホーツク地域における 冬期の気象と災害



2025/10/2(木) 13:30～

会場 オホーツク・文化交流センター
(エコーセンター2000 エコホール)
網走市北2条西3丁目

暴風雪災害時の避難所として閉館時の「道の駅」が
活用された【道の駅メルヘンの丘めまんべつ】
写真：北海道開発局

▶開会挨拶 (13:30～)

網走開発建設部長 佐々木 悟

▶基調講演

『オホーツク地域の冬期気象災害史から考える
これからの防災・減災』

北見工業大学 工学部社会環境系 准教授

白川 龍生氏

▶技術者の交流 (展示・休憩)

▶一般講演

『大雪や暴風雪時における道路管理者の取組』

網走開発建設部 次長 鈴木 武彦

『降雨融雪出水時における北見市広郷浄水場の対応』

公益社団法人 日本技術士会北海道本部 オホーツク技術士委員会
(北見市上下水道局 次長)

荒木 真

『暴風雪災害の防止・軽減に向けた寒地土木研究所の取組』

寒地土木研究所 雪氷チーム 研究員 武知 洋太

▶閉会挨拶 (16:45～)

寒地土木研究所 技術開発調整監 木下 豪

参加無料

▽お申込み▽

寒地土木研究所HP
<https://chouseikan.ceri.go.jp/web/event/>



寒地土木研究所HP

をご覧ください。

(公社) 土木学会 継続教育(CPD)
プログラム



認定番号：JSCE25-0828
認定単位：2.5 単位

(一社) 全国土木施工管理技士会連
合継続学習制度 (CPDS) プログラム



プログラム登録番号：998088
形態コード101-1分野 3unit

3unit

主催：国土交通省北海道開発局網走開発建設部、国立研究開発法人土木研究所寒地土木研究所、公益社団法人日本技術士会北海道本部オホーツク技術士委員会
後援：北見工業大学地域と歩む防災研究センター、網走市、一般社団法人網走建設業協会、網走測量設計協会、公益社団法人日本雪氷学会北海道支部

お問い合わせ先：寒地土木研究所 寒地技術推進室 (平日9:00～16:00 直通TEL 011-590-4046)

お知らせ

9月19日(金)

北海道インバウンドフォーラム

※詳細は38ページをご覧ください。

研究所だより

夏休みで旅行された方も多いと思います。

旅は、目的地に滞在するだけでなく、移動の過程も楽しみたいものです。その意味で残念なのは、我が国では<サンライズ>を除いて定期運航の寝台列車がすべてなくなってしまったことです。

遠い昔、筆者は上野・札幌間の<北斗星>に乗りました。夜の街を眺めながらの食堂車での食事は、コースでなくアラカルトでしたが、どんな高級レストランよりも美味しく思いました。で、次はいつか<カシオペア>だと思っていたら、いつの間になくなっていました。「飛び恥」という言葉もあり、欧州では寝台列車が復権していることを考えると、この状況は嘆かわしいの一言です。飛行機を舞台にしたものに比べて、寝台列車を題材にした推理小説は多数あるように、これは文化的にも由々しきことでしょう。

全国から寝台列車が消えた背景には、旅にも経済性や効率性を追求する考え方があると思います。

でも、効率優先で、早朝に出発して、昼食後には睡魔に襲われてバスの中で爆睡、車窓の美しい景色を全部スルー、なんて悲しいことです。急ぎ足でなく、旅のそれぞれの過程を大切に楽しむ方をしたいものです。

当研究所の観光に関する調査研究も、このような発想に立って進めております。(目黒)

10月2日(木)

第47回 技術者交流フォーラム事業in網走

※詳細は39ページをご覧ください。

国営滝野すずらん丘陵公園

9月1日(月)～30日(火)

顔に見える葉っぱを探せ!

顔に見える葉っぱを探しに行きましょう。見つけた葉っぱを写真に撮って見せてくれた方に景品をプレゼント!落ち葉はひろって持ってきてくれてOK!

●参加費 無料(入園料・駐車料金は別途)

●場 所 森の交流館

●時 間 9:00～17:00

9月13日(土)～9月28日(日)

コスモスフェスタ

カントリーガーデンに広がる約70万本の可憐なコスモスをお楽しみください。期間に合わせて、クラフト体験や秋を感じさせる、食や音楽のイベントを開催します。

●参加費 無料(入園料・駐車料金は別途)

●場 所 カントリーガーデン周辺

●時 間 9:00～17:00

9月20日(土)・21日(日)

たきの秋空文化祭2025&札幌南マルシェ～

札幌市内の小学生から社会人までの幅広い団体による屋外コンサートや南区のさまざまな店舗が集まるマルシェを開催!約70万本のコスモスが彩る丘の上で、音楽&食欲の秋をお楽しみください!

●参加費 無料(入園料・駐車料金は別途)

●場 所 カントリーハウス周辺

●時 間 10:00～16:00

*コンサートの撮影について、You Tubeなどへの投稿は控えてください。

※詳細は当公園ホームページ(URL: <http://www.takinopark.com/>)をご覧ください。滝野公園案内所(011-592-3333)までお問い合わせください。



●「開発こうほう」へご意見・ご感想をお寄せください。

(一財)北海道開発協会広報研修出版部

〒001-0011

札幌市北区北11条西2丁目セントラル札幌北ビル

電話 011(709) 5212

e-mail:pr@hkk.or.jp

●「開発こうほう」は、北海道開発協会のホームページでもご覧になれます。

●(一財)北海道開発協会では、賛助会員を募集しています。詳しくは、ホームページをご覧ください。

開発こうほう 第745号 令和7年9月1日発行

発行 (一財)北海道開発協会

印刷 (株)須田製版 不許複製

<https://www.hkk.or.jp/>



業 務 内 容

- 土木工事全般
- 道路維持管理業務
- TVカメラ調査・管更生
- 除排雪業務
- 排水構造物清掃
- 産廃物収集運搬及び中間処理

 HRM HOLDINGS GROUP

HRM 北海道ロードメンテナンス株式会社

HOKKAIDO ROAD MAINTENANCE

本 社	〒060-0031 札幌市中央区北 1 条東12丁目22番地48	TEL (011) 241-1692	FAX (011) 241-7774
真駒内事業所	〒005-0861 札幌市南区真駒内52番地	TEL (011) 592-6512	FAX (011) 594-2258
発 寒 事 業 所	〒063-0835 札幌市西区発寒15条12丁目 1-25	TEL (011) 665-3259	FAX (011) 665-8447
北 見 事 業 所	〒099-0878 北見市東相内町110番17	TEL (0157) 36-9811	FAX (0157) 36-9812



h-rm.co.jp/



お客さまの夢を
かなえるための
お手伝いをさせていただきます。

‘Challenge For Better Tomorrow’

そのために私たち一人ひとりがプロとしての専門性をみがき、
より高度なソリューションを提供してまいります。

三菱UFJモルガン・スタンレー証券

www.sc.mufg.jp

